

中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（6）

曾川1号遺跡（K地区）

2008

財団法人 広島県教育事業団

例　言

- 1 本書は平成17（2005）年度に調査を実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う曾川1号遺跡K地区（尾道市御調町大町字曾川所在）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は日本道路公団中国支社との委託契約により財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室が実施した。
- 3 整理作業・報告書作成は西日本高速道路株式会社中国支社（平成17年度）及び国土交通省中国整備局福山河川国道事務所（平成18・19年度）との委託契約により財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。
- 4 発掘調査は岩本正二（現・財団法人東広島市教育文化振興事業団文化財センター）、山田繁樹が担当した。
- 5 出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は辻　満久が中心となって行った。
- 6 本書は辻が執筆・編集した。
- 7 本書で使用した遺構の表示記号は次のとおりである。
S B：竪穴住居跡・掘立柱建物跡, S K：土坑, S D：溝状遺構, S X：性格不明遺構
- 8 出土遺物は原則として土器類は1／3、土製品と石器は2／3である。また土器の断面は、須恵器は黒塗り、そのほかは白抜きとした。
- 9 図版と挿図の遺物番号は同一である。
- 10 本書に使用した北方位は平面直角座標系第III座標系北である。
- 11 第1図は国土交通省国土地理院発行の1:50000の地形図（府中・尾道）である。

目 次

1	はじめに	(1)
2	位置と環境	(3)
3	調査の概要	(6)
4	遺構と遺物	(9)
	(1) 遺構	(9)
	a 積穴住居跡・掘立柱建物跡	(9)
	b 土坑	(14)
	c 溝状遺構	(27)
	d 性格不明遺構	(27)
	(2) 出土遺物	(32)
	a 概要	(32)
	b 土器	(32)
	c 土製品・石器・古錢	(46)
5	まとめ	(51)

挿 図 目 次

第1図	中国横断自動車道尾道松江線路線図	(1)
第2図	曾川1号遺跡周辺遺跡分布図(1:50000)	(4)
第3図	曾川1号遺跡位置図及び周辺地形図(1:2000)	(7)
第4図	曾川1号遺跡K地区遺構配置図(1:300)	(8)
第5図	曾川1号遺跡SB15実測図(1:60)	(10)
第6図	曾川1号遺跡SB16実測図(1:40)	(11)
第7図	曾川1号遺跡SB17・SK103実測図(1:60)	(12)
第8図	曾川1号遺跡SK104実測図(1:40)	(13)
第9図	曾川1号遺跡SK90~94実測図(1:40)	(15)
第10図	曾川1号遺跡SK95~100実測図(1:40)	(16)
第11図	曾川1号遺跡SK101・102・105・106・108実測図(1:40)	(18)
第12図	曾川1号遺跡SK107・109~112・114実測図(1:10, 1:40)	(19)
第13図	曾川1号遺跡SK113・115~117実測図(1:40)	(21)
第14図	曾川1号遺跡SK118~120・123・124実測図(1:40)	(22)
第15図	曾川1号遺跡SK121・122・125・128実測図(1:40)	(23)
第16図	曾川1号遺跡SK126・127・129・130実測図(1:20, 1:40)	(25)
第17図	曾川1号遺跡SK131~133実測図(1:40)	(26)
第18図	曾川1号遺跡SD19・20実測図(1:60, 1:40)	(28)
第19図	曾川1号遺跡SX15・16実測図(1:100, 1:40)	(29)
第20図	曾川1号遺跡SX17・18実測図(1:80, 1:40)	(30)
第21図	曾川1号遺跡SX25実測図(1:80)	(31)
第22図	曾川1号遺跡出土遺物実測図1(1:3)	(33)
第23図	曾川1号遺跡出土遺物実測図2(1:3)	(36)
第24図	曾川1号遺跡出土遺物実測図3(1:3)	(40)
第25図	曾川1号遺跡出土遺物実測図4(1:3)	(42)
第26図	曾川1号遺跡出土遺物実測図5(1:3)	(45)
第27図	曾川1号遺跡出土遺物実測図6(2:3)	(47)

図版目次

図版 1	a 遺跡遠景（南から）	図版 7	a SK95（北から）
	b 遺跡全景（北から）		b SK96（北西から）
	c 遺跡全景（南から）		c SK98（北東から）
図版 2	a K 1 区南半部（東から）		d SK101（東から）
	b K 2 区北半部（西から）		e SK102（西から）
	c K 3 区北半部（西から）		f SK108（南から）
図版 3	a K 1 区北半部（東から）	図版 8	a SK112遺物出土状況（北から）
	b K 2 区南半部（西から）		b SK112（東から）
	c K 3 区南半部（西から）		c SK120（南から）
図版 4	a SB15（東から）		d SK125（北から）
	b SB17（北西から）		e SK126遺物出土状況（東から）
	c SK104（北東から）		f SK126（東から）
図版 5	a SB15（南から）	図版 9	a SD19（北西から）
	b SB17（北東から）		b SD20（西から）
	c SK104（北東から）		c SX15（西から）
図版 6	a K 2 区中央部（西から）	図版 10	a SX17（西から）
	b K 1 区南側（北から）		b SX18（東から）
	c K 1 区中央部（北から）	図版 11	出土遺物 1
		図版 12	出土遺物 2
		図版 13	出土遺物 3

表目次

第 1 表	中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧表 (2)
第 2 表	曾川 1 号遺跡調査地区名称一覧 (5)
第 3 表	曾川 1 号遺跡出土遺物（土製品・石器）計測表 (46)
第 4 表	曾川 1 号遺跡出土土器観察表 1 (48)
第 5 表	曾川 1 号遺跡出土土器観察表 2 (49)
第 6 表	曾川 1 号遺跡出土土器観察表 3 (50)

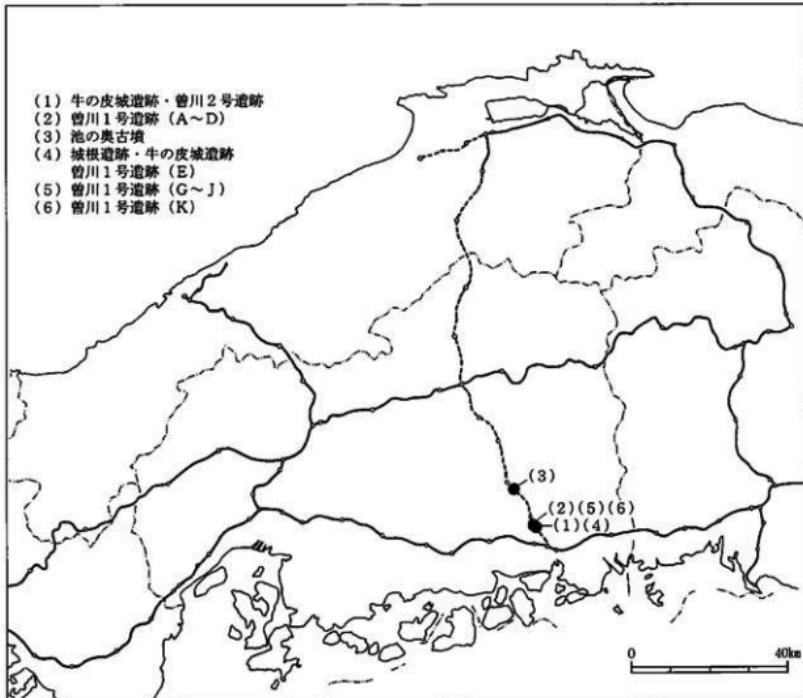
1 はじめに

中国横断自動車道尾道松江線は本州四国連絡道路尾道今治ルート（瀬戸内しまなみ海道）と一緒に、山陰・山陽及び四国地方を南北に結ぶ地域連結構想を推進し、この区域の産業、経済、文化の発展と沿線地域の生活向上に寄与する路線として期待されている。

事業者である日本道路公団中国支社尾道工事事務所（以下「道路公団」という。）と広島県教育委員会（以下「県教委」という。）は平成11（1999）年7月から予定路線内の文化財等の有無及び取り扱いについて協議を始めた。

県教委の踏査及び試掘調査の結果、尾道市御調町内の予定路線内には曾川1号遺跡、曾川2号遺跡、城根造跡、牛の皮城跡の存在が明らかとなった。県教委は道路公団に対してこれらの遺跡等について現状保存できない場合は発掘調査が必要な旨回答した。

これを受け道路公団は平成14年7月から工事の優先する箇所毎に文化財保護法第57条の3に



第1図 中国横断自動車道尾道松江線路線図

基づく埋蔵文化財発掘通知を県教委に逐次提出するとともに、発掘調査の実施を平成14年度9月以降、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）及び平成15年4月からその事業を引き継いだ財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室（以下「事業団」という。）に、逐次依頼した。センター及び事業団では依頼を受けて発掘調査を実施しており、その成果については平成17年3月に牛の皮城跡・曾川2号遺跡の報告書を皮切りとして第1表のように報告書を作成している。

本書は平成14年に事業団が道路公団と委託契約し、発掘調査を実施した曾川1号遺跡の内最西端に当たるK地区の調査成果をまとめたものである。調査は平成17年4月11日～7月1日のおよそ3ヶ月間実施し、9月17日にはL地区とともに現地説明会を実施し、約150名の参加があった。

本書は以上のような経過のもとに実施した発掘調査の成果をまとめたものである。今後の埋蔵文化財の資料として、また地域の歴史の一端を知る資料として少しでも寄与できれば幸いである。

なお、中国横断自動車道尾道松江線建設事業は、平成17（2005）年10月1日の日本道路公団の解散に伴って西日本高速道路株式会社に引き継がれ、平成18（2006）年度からは国土交通省の直轄事業となった。発掘調査に当たっては、国土交通省中国整備局福山河川国道事務所、西日本高速道路株式会社中国支社尾道工事事務所、尾道市教育委員会及び地元の方々に多大なるご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧表

報告書	遺跡名(第 次)	地区名称	調査期間	所在地	時期	内 容
(1) 第12集	牛の皮城跡 (北郭群)	第1次 敗状堅堀群	平成15年1月20日～ 3月14日	尾道市御調町 大町字二の丸	中世	山城跡
		第2次 郭群	平成15年7月7日～ 10月31日			
		第3次 西堅堀	平成15年11月10日～ 11月28日			
	曾川2号遺跡		平成15年1月20日～ 3月7日	尾道市御調町 大町字西川	古代末～中世	集落跡
(2) 第18集	曾川1号遺跡	A地区 旧・平成14年度調査区	平成14年10月21日～ 平成15年1月17日	尾道市御調町 大町字曾川	弥生・古墳時代～中世	集落跡
		B地区 旧・P2第一	平成15年4月7日～ 5月23日			
		C地区 旧・P2第二	平成16年1月6日～ 2月5日			
		D地区 旧・P1				
(3) 第19集	池ノ奥古墳		平成16年8月23日～ 10月28日	世羅郡世羅町 宇津戸字天神	古墳時代後期	古墳
(4) 第22集	城根遺跡			尾道市御調町 大町字城根	古墳時代か	箱式石棺
	牛の皮城跡 (北郭群)	第4次 5郭	平成18年1月30日～ 2月24日	尾道市御調町 大町字二の丸	中世	山城跡
(5) 第23集	曾川1号遺跡	E地区 旧・P4	平成15年12月1日～ 12月19日	尾道市御調町 大町字曾川・ 米田	縄文時代後期 ～中世	遺物包含層
		G地区 旧・P3				
		H地区 旧・P3側道	平成16年6月7日～ 8月6日			
		I地区 旧・P4側道				
		J地区 旧・P2	平成17年1月11日～ 3月4日			集落跡
(6) 第24集 本書	K地区 K地区	平成17年4月11日～ 7月1日				

2 位置と環境

曾川1号遺跡は尾道市御調町大町に所在する縄文時代から近世の集落跡である。

遺跡の所在する尾道市は広島県の南東部に位置しており、平成17（2005）年に旧御調郡の二町（御調町・向島町）を、翌平成18年には因島市・豊田郡瀬戸田町を編入合併し、面積284.8km²、人口15万人を有する都市となった。御調町は市内の北部に位置し、北は世羅郡世羅町、東は府中市、西は三原市と接する。町の北西及び南東には標高300～600mほどの山塊があり、芦田川の支流である御調川及びこの御調川に注ぐ小河川が形成した沖積地・谷部に集落を形成している。

旧石器～縄文時代

旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代になると明確な遺構は発見されていないが、本遺跡のE地区で後期前半頃の土器がまとまって出土している。また、A地区では晩期の土器片が出土している。

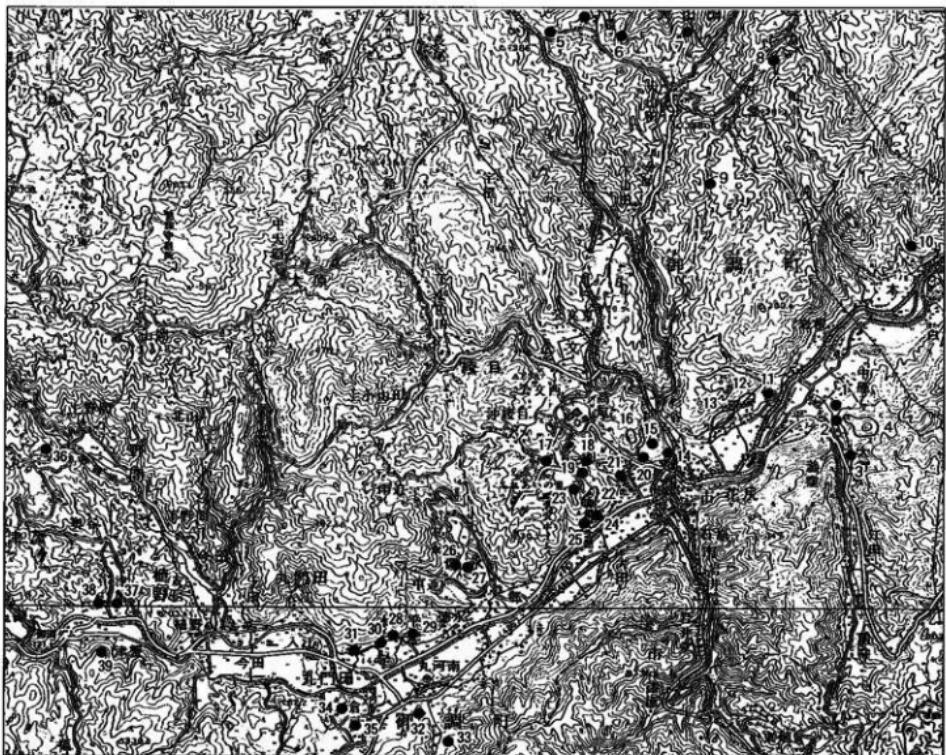
弥生時代

弥生時代になると、御調川北岸を中心に、弥生土器や磨製石斧が採集された遺跡が数多く存在する。しかしながら、調査例は少なく、丸門田にある本郷平廐寺跡の調査では中期の土器が出土したが、この他の各所で採集した土器は後期の土器がほとんどである。曾川1号遺跡では弥生時代後期～終末期の円形や隅丸方形の堅穴住居跡や土坑を検出し、この時期には集落を形成していたことを窺わせ、在地の土器に混じって吉備や山陰からの搬入品やその影響を受けた土器が出土していることから他地域との交流も少なからずあったと考えられる。曾川1号遺跡と御調川を挟んで北側にある貝ヶ原遺跡では特殊器台が出土しており、御調川流域でも墳丘墓に葬られる有力な首長が現れたことを示している。

古墳時代

古墳時代になると遺跡の数は激増する。その多くは古墳であるが、調査例は意外に少ない。東西南北の幹線道の交点であった市周辺では箱式石棺を埋葬主体とする古墳と横穴式石室を埋葬主体とする古墳が交錯するが、この他の地域では横穴式石室を埋葬主体とする古墳がほとんどである。

堅穴式石室を埋葬主体とする古墳には天神山第2号古墳がある。高尾第1号古墳、高尾西第3・4号古墳、後口山古墳、高神古墳群、正尺山古墳群、明神山第4号古墳は箱式石棺を埋葬主体とする古墳である。一方、横穴式石室を埋葬主体とする古墳には梅ノ木古墳群、小猿古墳、中倉谷古墳、七つ塚古墳群、高尾西第1・2号古墳、神古墳群、神西古墳群、貝ヶ原古墳群、ムカデ岩山口古墳群、河崎古墳、要谷山古墳、城の東古墳、市山古墳群、東中倉古墳群、大羽谷古墳群などがある。一方、同時期の集落跡の調査は曾川1号遺跡で確認している。また、御調町から久井町にかけては御調古窯跡群として知られており、県内でも有数の窯場であった。これらの造墓集団の背景には窯業に携わった工人集団も想定可能である。



第2図 曽川1号跡周辺遺跡分布図 (1:5,000)

- 1 曽川1号跡
- 2 曽川2号跡
- 3 城根遺跡
- 4 牛の皮城跡
- 5 梅ノ木古墳群
- 6 小猿古墳
- 7 中倉谷古墳
- 8 上千堂遺跡
- 9 後呂谷遺跡
- 10 河崎古墳
- 11 貝ヶ原遺跡
- 12 ムカデ岩山口古墳群
- 13 貝ヶ原古墳群
- 14 後口山古墳
- 15 後口山遺跡
- 16 高尾1号跡
- 17 七つ塚古墳群
- 18 高尾西古墳群
- 19 高尾西遺跡
- 20 土木屋遺跡
- 21 高尾古墳群
- 22 高尾2号跡
- 23 神古墳群
- 24 神西遺跡
- 25 神西古墳群
- 26 高神古墳群
- 27 正尺山古墳群
- 28 城の東古墳
- 29 市山古墳群
- 30 東中倉古墳群
- 31 本郷平蔭寺跡
- 32 大慶寺遺跡
- 33 大羽谷古墳群
- 34 明神山古墳群
- 35 隠れ迫巣跡
- 36 天神遺跡
- 37 天神山古墳群
- 38 要谷山古墳

古代以降

古代の遺跡では昭和60～63年にかけて本郷平廃寺跡⁽⁷⁾が調査され、7世紀末に創建された備後南部地域で最も古い寺院の一つであると判明した。塔と金堂を南に配する四天王寺式の伽藍配置をもち、寺域は一町四方と推定されている。瓦のほかに正六角形に復元できる磚や螺鈿が出土した。磚の1面には曼荼羅、もう1面には同心円の叩き目がある。

古代山陽道は備後国府があったとされる府中市から御調川沿いに西進して市に至り、安芸国へと向かう。本郷平廃寺跡は備後国と安芸国の境目にあり、国府から備後北部へ向かう交通の要衝に造られており、中央政権との密接な関係が予想できる。

註

- (1) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4)城根遺跡・曾川1号遺跡(E地区)・牛ノ皮塚(第4次)』2008
- (2) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)曾川1号遺跡(A～D地区)』2006
- (3) 川越哲志「本郷平廃寺出土の弥生土器」広島県御調町教育委員会『本郷平廃寺』
- (4) 潟見浩「貝ヶ原遺跡出土の特殊器台形土器」広島県教育委員会『広島県文化財調査報告』第17集 1991
- (5) 御調町教育委員会『御調町御調町高尾古墳発掘調査報告付御調町後口山古墳発掘調査概報』1971
- (6) 註(5)に同じ
- (7) 広島県御調町教育委員会『本郷平廃寺』1989

参考文献

広島県の地名 日本書紀地名大系第35巻 平凡社 1982
角川日本地名大辞典 34 広島県 角川書店 1987

第2表 曾川1号遺跡調査地区名称一覧

調査期間		調査時名称	報告名称	事業名	報告書
年度	月日				
平成14年度	10月21日～1月17日	平成14年度調査区	A地区	中国横断自動車道尾道松江線建設事業	(2)第18集
平成15年度	4月7日～5月23日	P2第一調査区	B地区		
		P2第二調査区	C地区		(4)第22集
	1月6日～2月5日	P1	D地区		
平成16年度	12月1日～12月19日	P4	E地区	大町地区防火水槽設置事業	第13集
	4月14日～4月28日	防火水槽	F地区		
	6月7日～8月6日	P3	G地区		(5)第23集
		P3側	H地区		
		P4側	I地区	一般国道486号道路改良工事	本書
平成17年度	1月11日～3月4日	P2	J地区		
平成18年度	4月11日～7月1日	K地区	K地区		
	7月11日～10月7日	L地区	L地区		
平成18年度	9月11日～12月22日	M地区	M地区		

3 調査の概要

曾川1号遺跡は尾道市御調町大町字曾川に所在する。遺跡は御調川の南岸、牛の皮城跡が築かれた丘陵の裾部に立地し、調査前は宅地・畠地・果樹園として利用され、一部は竹藪となっていた。西側には御調川の支流である江国川が北流し、標高は72~85m、御調川との比高差は12~25mである。

曾川1号遺跡は工事に着手する地区から調査を進めたため、調査箇所が散在し、調査箇所名も場当たり的であった。このため、平成17（2005）年に曾川1号遺跡（A～D地区）の報告をする際に整理を行い、調査時系列に沿って改めて地区名称を付与した（第2表、第3図参照）。調査は平成14（2002）年度にA地区を開始し、平成15（2003）年度にB～E地区を、平成16（2004）年度にはF～J地区の調査を行った。これらの調査により、縄文時代から中世、さらに近世から現在までの長期間にわたり集落が営まれていたと確認できた。

さて、今回報告するK地区は曾川1号遺跡の調査地区の中でも、最も西侧に位置しており、L地区が東側に隣接する。調査地区は生活道で分断されているので便宜的に北から南の順に分断された区画毎にK1～K3と呼称した。

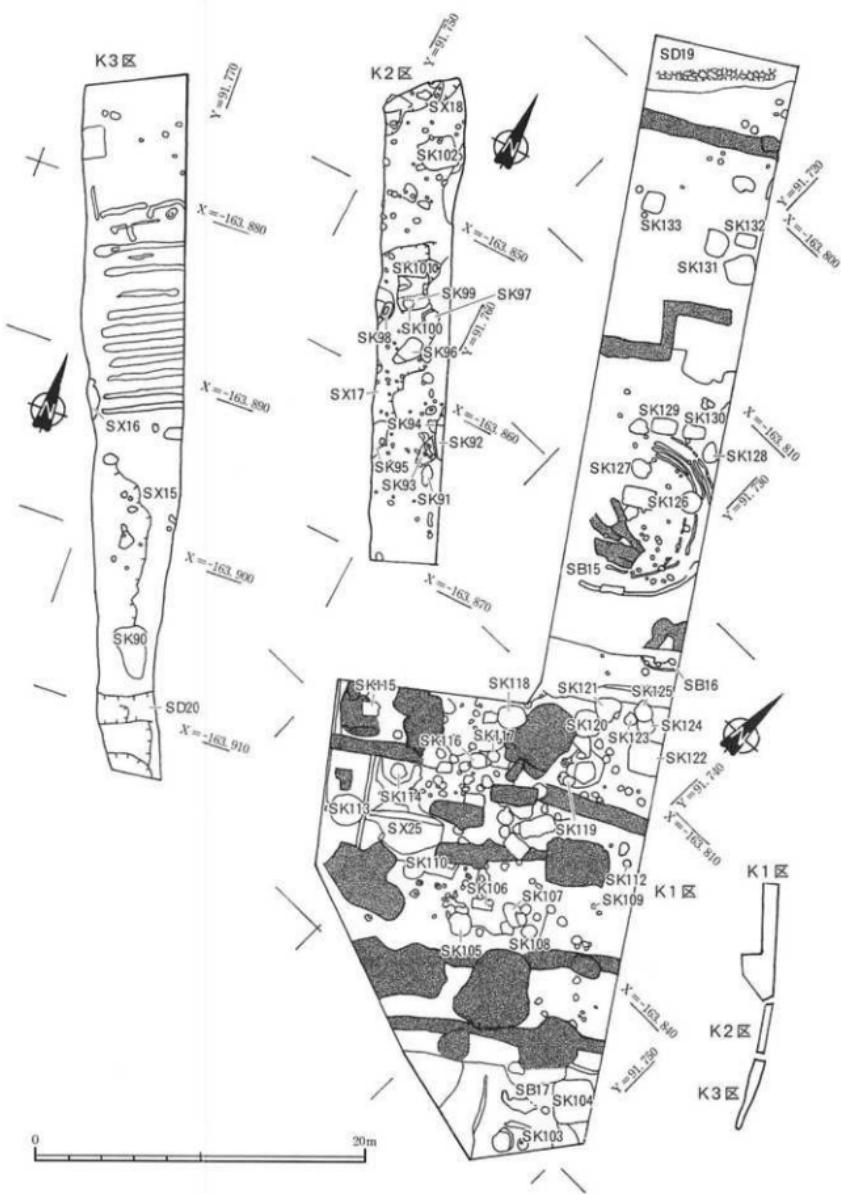
調査の結果、竪穴住居跡2、掘立柱建物跡1、土坑44、溝状造構2、性格不明造構5この他多数のピットや落ち込みを検出した。このうちピットや落ち込みは近世から現代のものが多く、中世以前の造構の多くはこれらの継続利用により破壊されているものが多いと推測される。特にK1区の南半分は近世から現代の造構が密集していた。また、K3区の北半は幅の狭い溝が一定の間隔で東西方向に配されており、これらは畝と推測できるので畑であったと思われる。

出土遺物には土器類（縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・瓦器・陶器・磁器）、土製品（瓦・面子状土製品）、石器（石錐・砥石）、古錢がある。

本書では住居跡、土坑、溝状造構、性格不明造構の順に記述したが、曾川1号遺跡の造構番号はA地区からの連番となっており、番号の若い順に記述したので、必ずしも時代順とはなっていない。



第3図 曽川1号遺跡位置図及び周辺地形図 (1:2000)



第4図 曽川1号遺跡K地区造構配置図(1:300)

4 遺構と遺物

(1) 遺構

a 堪穴住居跡・掘立柱建物跡

調査区内で確認できた遺構にはSB15, SB16, SB17がある。SB15・SB16は弥生時代の堪穴住居跡で、SB17は中世頃の掘立柱建物跡である。

SB15 (第5図、図版4a, 5a)

K1地区のやや北側中央部分からやや西寄りに位置する。L地区に一部伸びている。平面形は円形ないし稍円形で、少なくとも2回以上の拡張が行われていると思われる。

柱穴とそれに伴う壁溝について具体的な対応関係は詳らかにできないが、P1-P8を住居跡の主軸と想定した場合、北側に残存する壁溝から推測すれば、住居跡は内側(1-a, 1-b, 1-c)と外側(2-a, 2-b)の2期に大きく分かれると思われる。

1期の住居跡

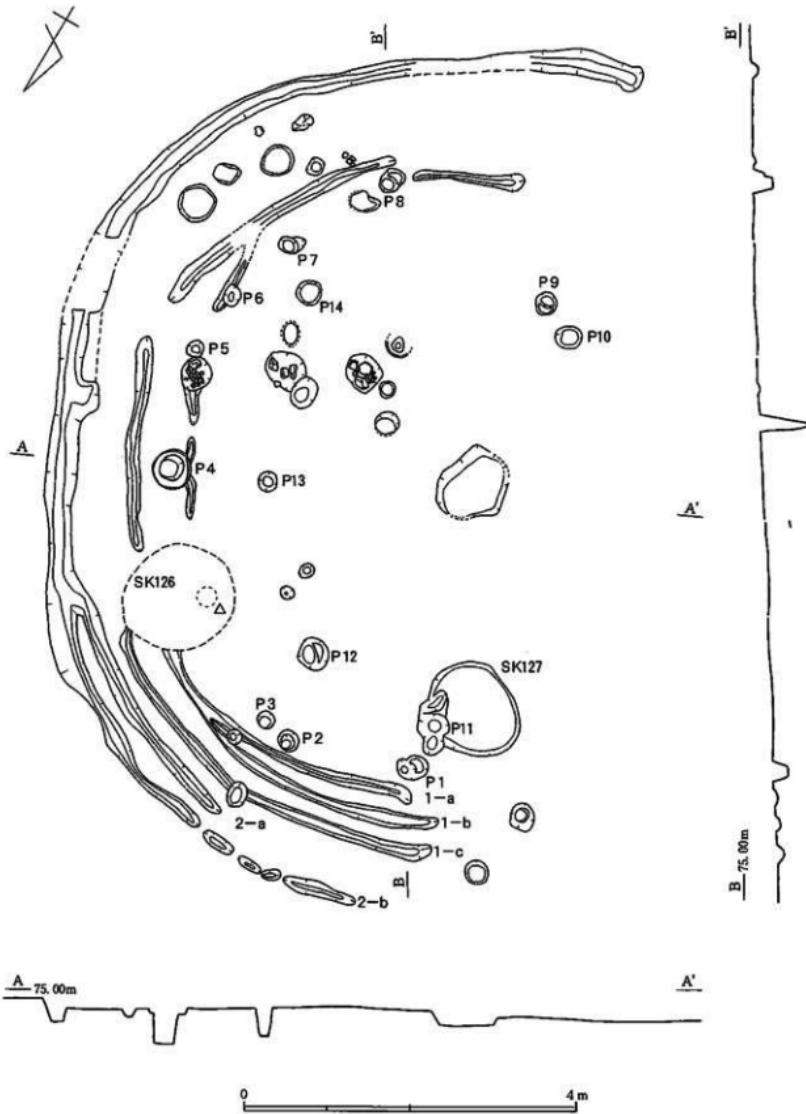
1-aは最も初期の住居跡で大きさ径7.8m, 1-bはその次の住居跡で大きさ径8.06mで、西側をわずかに拡張している。1-cは1-bの次の住居跡で大きさ径8.4mで、南側のP7付近から外側に約30cm拡張し、東側を半周している。柱穴は基本的には8本柱で検出した柱穴の対応はP11(40×30cm, 深さ44cm) - P12(40×36cm, 深さ35cm) - P13(25×23cm, 深さ34cm) - P14(40×38cm, 深さ13cm) - P8(23×19cm, 深さ32cm) - P9(28cm×25cm, 深さ33cm)で、各柱間距離はP11-P12が174cm, P12-P13が218cm, P13-P14が235cm, P14-P8が165cm, P8-P9が230cmである。

2期の住居跡

2期の住居跡は1期の壁溝を使用せずにその外側に新たに壁溝を穿って、全面的に改築したものとなっている。

2-aは大きさ径10.3m, 2-bは2-aの次の段階の住居跡で大きさ径10.6mで、北東側に少し拡張している。2-bは廃絶直前のものと思われる。

柱穴の対応関係は、SK126内に柱穴(第5図に△で示す)が存在したと考えられることから、P1(24×24cm, 深さ20cm) - P2(26×24cm, 深さ40cm) - P4(47×46cm, 深さ43cm) - P5(22×20cm, 深さ30cm) - P7(26×20cm, 深さ21cm) - P8もしくはP1-P3(21×20cm, 深さ32cm) - △ - P4 - P5 - P7 - P8の12本柱構造とP1-P2-△-P4-P6(30×20cm, 深さ27cm) - P8もしくはP1-P3-△-P4-P6-P8の10本柱構造の2構造想定でき、各柱間距離はP1-P2が145cm, P1-P3が178cm, P2-△が200cm, P3-△が165cm, △-P4が175cm, P4-P5が150cm, P4-P6が223cm, P5-P7が167cm, P7-P8が145cm, P6-P8が227cmである。このうちのいずれか2-aまたは2-bに対応すると考えられる。拡張による多柱化も考えられるが積極的な根拠はない。



第5圖 曽川1号遺跡SB15実測図 (1:60)

遺物は床面から弥生土器（1～5・7～10）、石錐（122）が出土している。この他に覆土中から土師器（6）が出土している。

SB16（第6図、図版3a）

K1区のやや北側、中央部分から西端寄りに位置する。前述したSB15の南約3.7mに存在する。遺構の続き具合からするとL地区に相当部分が伸びていると思われる。

遺構の遺存状況は上面がかなり削平されたため、南側の壁溝部分のみ存在する。

壁溝の規模は長さ235cm、幅16cm、深さ6cmで、現存する壁溝の形状から推測すると円形ないしは楕円形の堅穴住居跡であったと考えられる。伴う柱穴等は未確認であるが、壁溝側のピットが伴う可能性がある。

遺物は床面近くから弥生土器（11～22）が、覆土中から須恵器（23～25）、瓦質土器（26）、砥石（121）が出土している。

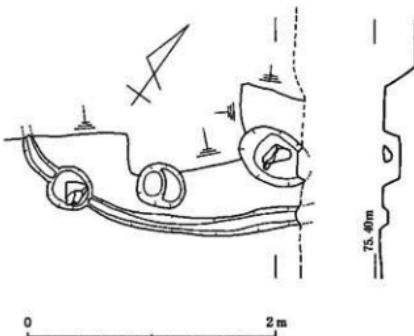
SB17（第7図、図版4b、5b）

K1区の南端に位置する。北東側の大部分はL地区にあるが、これらは本来一体遺構なので、L地区の調査成果と併せて報告する。また、本遺構に付属する可能性が極めて高いSK103とSK104についても併記する。

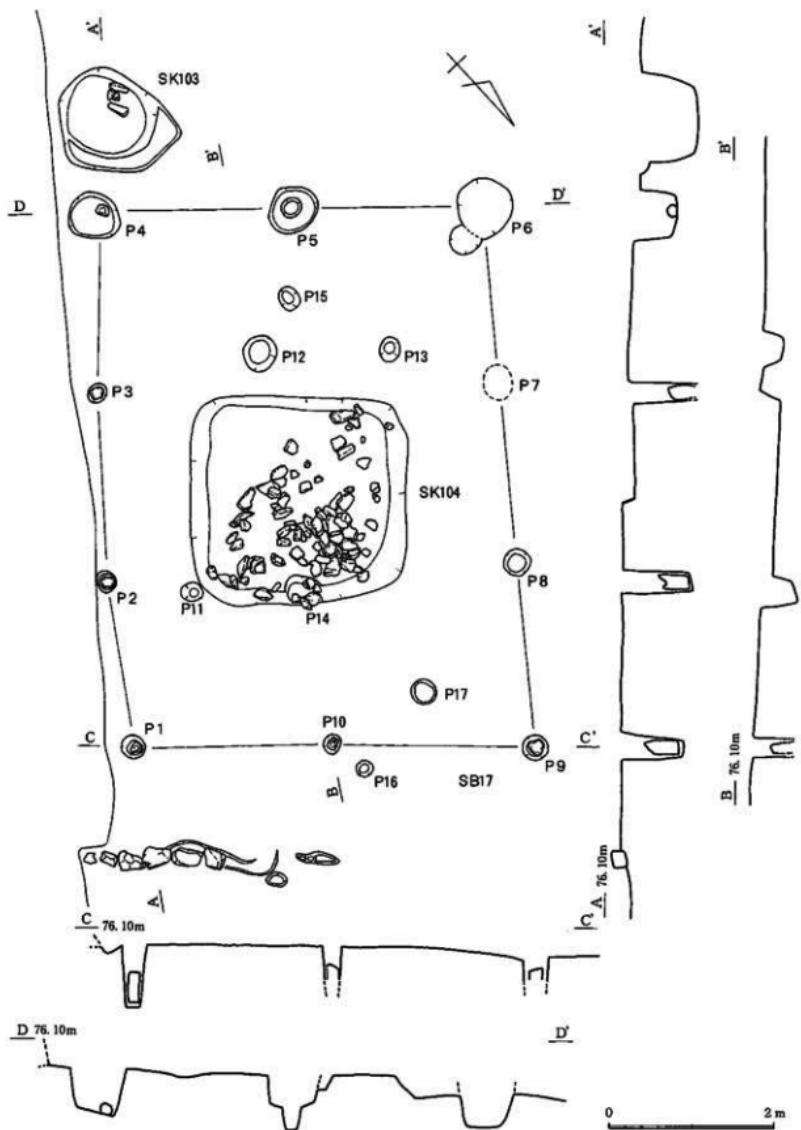
本遺構は南北3間（P1-P2-P3-P4、P6-P7-P8-P9）×東西2間（P1-P10-P9、P4-P5-P6）の規模で、柱穴の半分以上に柱根が残っている。また建物の北側には石列が存在する。

建物の南北は等高線に平行し、N37°Eを指す。柱間距離は南北方向がP1-P2で2.0m、P2-P3で2.3m、P3-P4で2.2m、東西方向はP1-P10で2.4m、P10-P9で2.4mである。建物の面積は南北方向6.5m、東西方向4.8mの31.2m²である。

柱穴の規模についてはP1が径26cm、深さ72cmで、径17cmの針葉樹の柱根が長さ35cm分残っていた。柱掘方のほぼ底面に柱を据えており、根石などはない。P2は径25cm、深さ97cmで、P1と同様な状況で柱根が残っていた。P3は径20cm、深さ45cm以上で、柱根がある。P4は56×62cmで、深さ50cmで、わずかに柱根が残っていた。P5は50×55cmで、深さ36cmの穴の中央に径22cm、深さ24cmの穴があり、中央の穴は柱根が腐ったものと考えられる。P6は上部が削平を受けしており、径65cm、深さ42cmである。P7は柱根底まで削平されていた。P8は径30cm、深さ56cm、P9は径30cm、深さ20cm以上で径16cmの柱根が残っている。P10は径22cm、深さ40cm以上で、径16cmの柱根がある。なお、P12とP14は、P1～P10と柱筋が通らないが、土坑SK104の位置等



第6図 曽川1号遺跡SB16実測図 (1:40)



第7図 善川1号遺跡SB17・SK103実測図 (1:60)

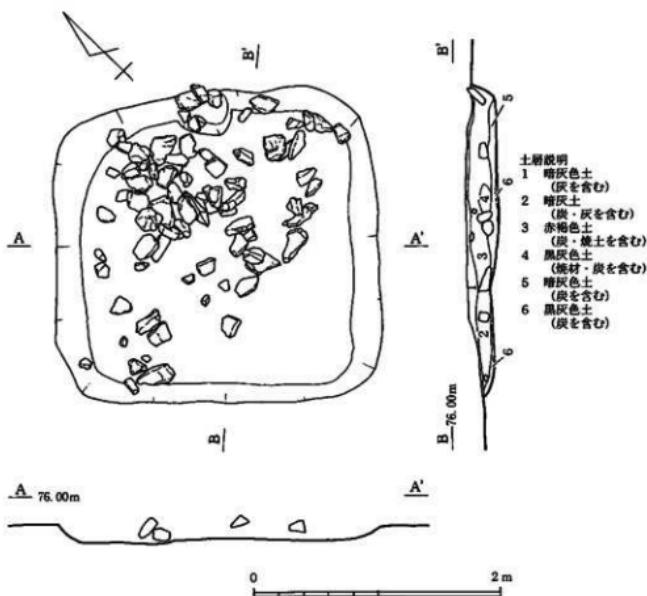
から見れば、この建物の柱であった可能性がある。

SB17の北側には石列が存在する。P1-P10-P9線から北に1.5mで石列の外側面が描う。石列と石抜き取り痕跡を含めれば長さ2.1m分を確認したが、北西側は削平されて残っていない。石材は長辺30cm×短辺20cm×厚さ15cmほどの大きさで、

横積みしている。現状は一段積みで高さは約12cmある。石列は基壇状の高まりの縁石と思われ、SB17の建物は基壇状に整地された土地に建てられていた。

SK104（第8図、図版4c, 5c）は平面形が隅丸方形の土坑で、東西2.5m、南北2.4m、残存の深さ0.4mで、土坑底面は平坦である。そのレベルは南側がやや低くなっている。底に人頭大の焼けた石が堆積し、石の間には多数の焼土塊（土壁が焼けたもの）があり、炭や竹・材木の焼片が大量に含まれていた。火を受けた廃材が堆積したものであろう。土坑の底面・側面は焼けていない。また、金属が焼けたような痕跡もない。出土遺物はSK104から陶器壺（34）・土師質土器皿（35～43）・天目碗（27）・染め付け・青磁・備前焼などが出土している。これらの遺物は概ね16世紀代と思われる。

SK103（第7図）はSB17の南東に位置する土坑である。平面形は円形で、規模は上面で長軸1.3m、短軸1.05m、底面では長軸1.0m、短軸0.85mである。深さは0.66mで、坑底面はほぼ平坦である。土坑埋土には焼土塊や石が含まれる。



第8図 曽川1号遺跡SK104実測図（1:40）

SB17は石で縁取った基壇状の高まりに建てた建物であり、建物内部にSK104が、建物外部にSK103が存在する。これらは一体として機能していたと推定できるが、性格については不明である。SK104は火を使用する施設の下部構造であり、SK103は水などの液体を溜めた遺構と考えられるが、可能性にとどまる。

b 土坑

SK90（第9図）

K 3 区南側中央部に位置する。SD20から北へ約 1 m 離れて存在する。規模は $331 \times 202\text{cm}$ 、深さ 31cm で、平面形は北辺が広がり、歪な隅丸二等辺三角形状を呈する。

SK91（第9図）

K 2 区やや南側東端部付近に位置する。SK93が北側に隣接する。規模は長さ 186cm 、幅 68cm 、深さ 11cm で、平面形はやや歪な梢円形である。長軸方向はN $16^{\circ} 15' W$ である。

SK92（第9図）

K 2 区やや南側東端部に位置する。SK93が西に近接する。規模は $336 \times 36\text{cm} + \alpha$ 、深さ 18cm で、L 調査区に延びると思われる。平面形は不明である。北側に一段高い平坦面がある。遺物には縄文土器（28）・弥生土器（29, 30）が出土している。

SK93（第9図）

K 2 区やや南側東端部付近に位置する。SK94から東へ約 2.2m 離れ、SK94・SK92・SK91に囲まれるように存在する。規模は $144 \times 111\text{cm}$ 、深さ 30cm で、平面形は不整な五角形状を呈する。底面には径 $26 \sim 20\text{cm}$ 、深さ $33 \sim 18\text{cm}$ の小ピットが存在する。

SK94（第9図）

K 2 区やや南側東端部付近に位置する。SK95から東へ約 2m 離れて存在する。規模は $100 \times 54\text{cm}$ 、深さ 29cm で、南東部分がSK93により破壊されている。平面形は不定形で、底面に $49 \times 31\text{cm}$ 、深さ 20cm と $33 \times 17\text{cm}$ 、深さ 11cm の小ピットが存在する。

SK95（第10図、図版 7 a）

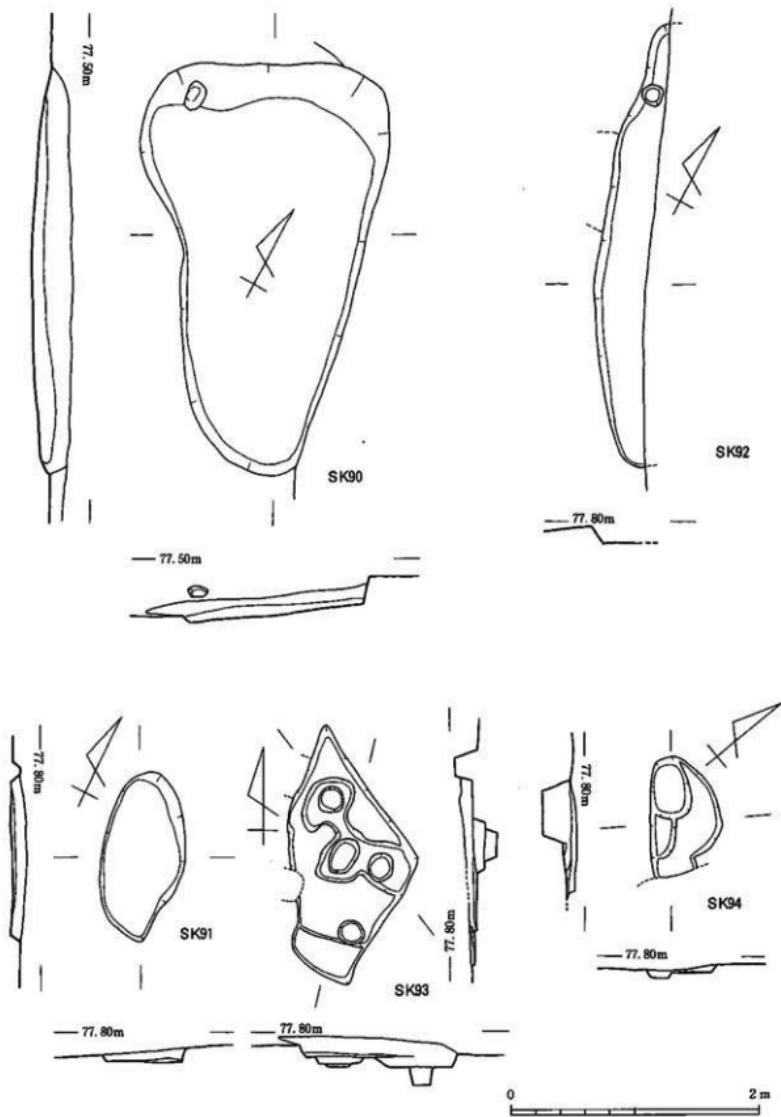
K 2 区のやや南側西端部に位置する。SK93から西へ約 2.2m 離れて存在する。規模は長さ 250cm 以上、幅 90cm 以上、深さ 18cm で、西半部は調査区外にのびる。平面形は歪な梢円形と思われる。

SK96（第10図、図版 7 b）

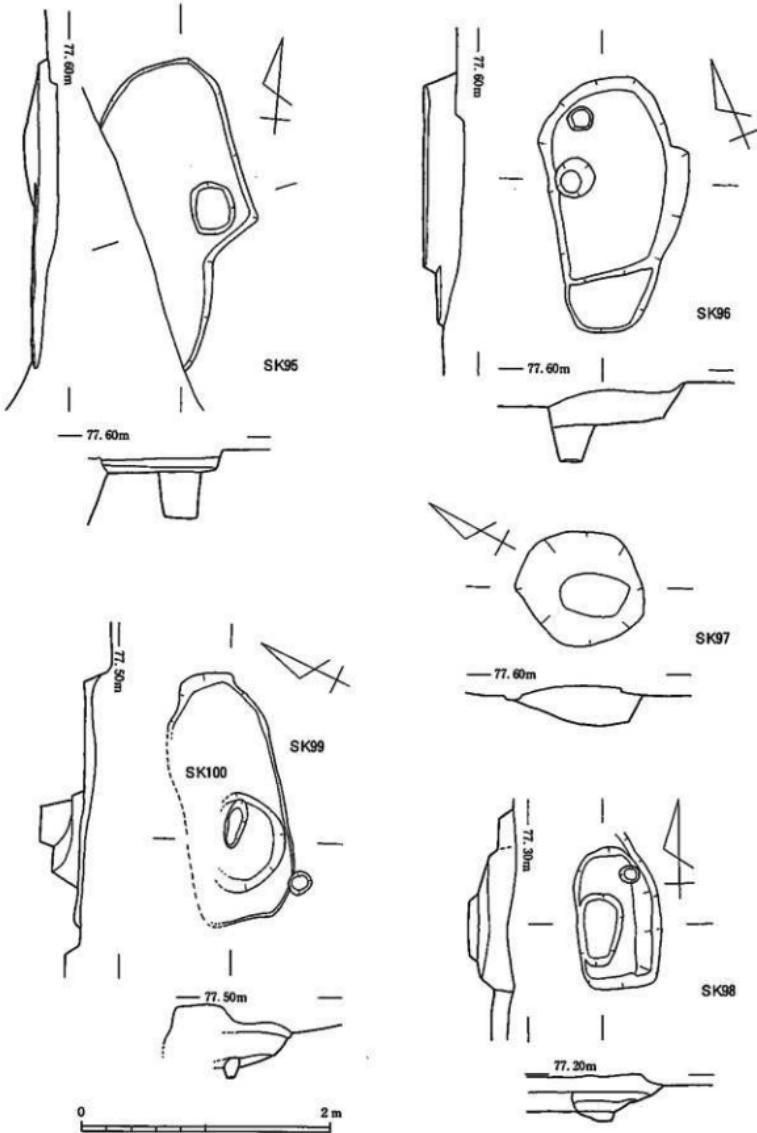
K 2 区の中央部に位置する。SK97から南へ約 1m 、SK98から東へ約 1.6m 離れたところにある。規模は長さ 202cm 、幅 114cm 、深さ 27cm で、平面形がやや歪な長方形の土坑である。長軸方向はN $18^{\circ} E$ である。

SK97（第10図、図版 6 a）

K 2 区のほぼ中央部やや東側に位置する。SK99が西に隣接し、SK96から北へ約 1m 離れて存在する。規模は $102 \times 97\text{cm}$ 、深さ 30cm で、平面形がほぼ円形の土坑である。



第9図 曽川1号遺跡SK90~94実測図 (1:40)



第10図 曽川1号遺跡SK95~100実測図 (1:40)

SK98 (第10図, 図版 6 a + 7 c)

K 2 区のほぼ中央部やや西側に位置する。SK100が東に隣接し, SK96から西へ約1.6m離れて存在する。規模は長さ114cm, 幅68cm, 深さ36cmで, 平面形が長方形の土坑である。長軸方向はN 3° 15' Wを指す。西辺底面に長さ60cm, 幅36cm, 深さ29cmの長方形のピットがある。

SK99 (第10図, 図版 6 a)

K 2 区のほぼ中央部に位置する。SK101から南へ約1m, SK97とSK98に東西を挟まれるよう に存在する。規模は長さ201cm, 幅50cm+ α , 深さ22cmで, 平面形が長方形の土坑である。長軸方 向はN 54° Eである。SK100を破壊している。

SK100 (第10図, 図版 6 a)

K 2 区のほぼ中央部付近に位置する。SK101から南へ約1.5m, SK97・SK98に東西を挟まれて いる。北部を欠失しているが, 規模は80×52cm+ α , 深さ35cmで, 平面形は円形と思われる。底 面には42×16cm, 深さ10cmの小ピットが存在する。SK99により上面が破壊されている。

SK102 (第11図, 図版 6 a + 7 d)

K 2 区のやや北側ほぼ中央部に位置する。SK99から北へ約1m離れた所に存在する。規模は 長さ178cm, 幅108cm, 深さ39cmで, 平面形が長方形の土坑である。主軸方向はN 61° 15' E であ る。

SK102 (第11図, 図版 7 e)

K 2 区の北側やや東寄りに位置する。SX18から南に約2m離れて存在する。規模は218×200 cm, 深さ39cmで, 平面形が長方形の土坑である。主軸方向はN 49° Eである。北東辺が南西辺よ りやや広くなっている。北隅付近には43×27cm, 深さ55cmの小ピットがある。

SK105 (第11図)

K 1 区の南側中央部に位置する。SK106から南へ約0.5m離れて存在する。規模は155×142cm, 深さ55cmで, 平面形は北側が一部破壊されているもののはば円形と思われる。坑底面はやや東寄 りになっている。

SK106 (第11図)

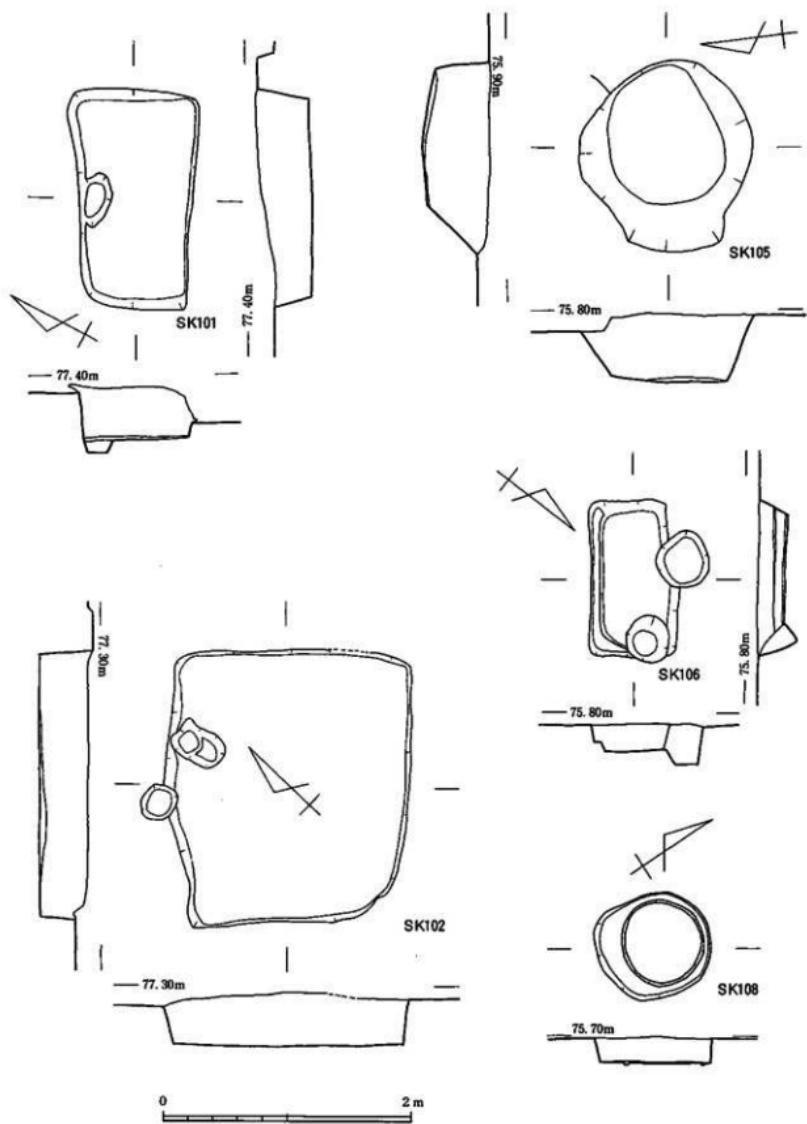
K 1 区の南側中央部に位置する。SK105から北へ約0.5m, SK107から西へ約0.7m離れて存 在する。長さ126cm, 幅72cm, 深さ21cmで, 平面形が長方形の土坑である。主軸方向はN 51° 30' E である。南東辺に幅5cmの平坦部がある。

SK107 (第12図)

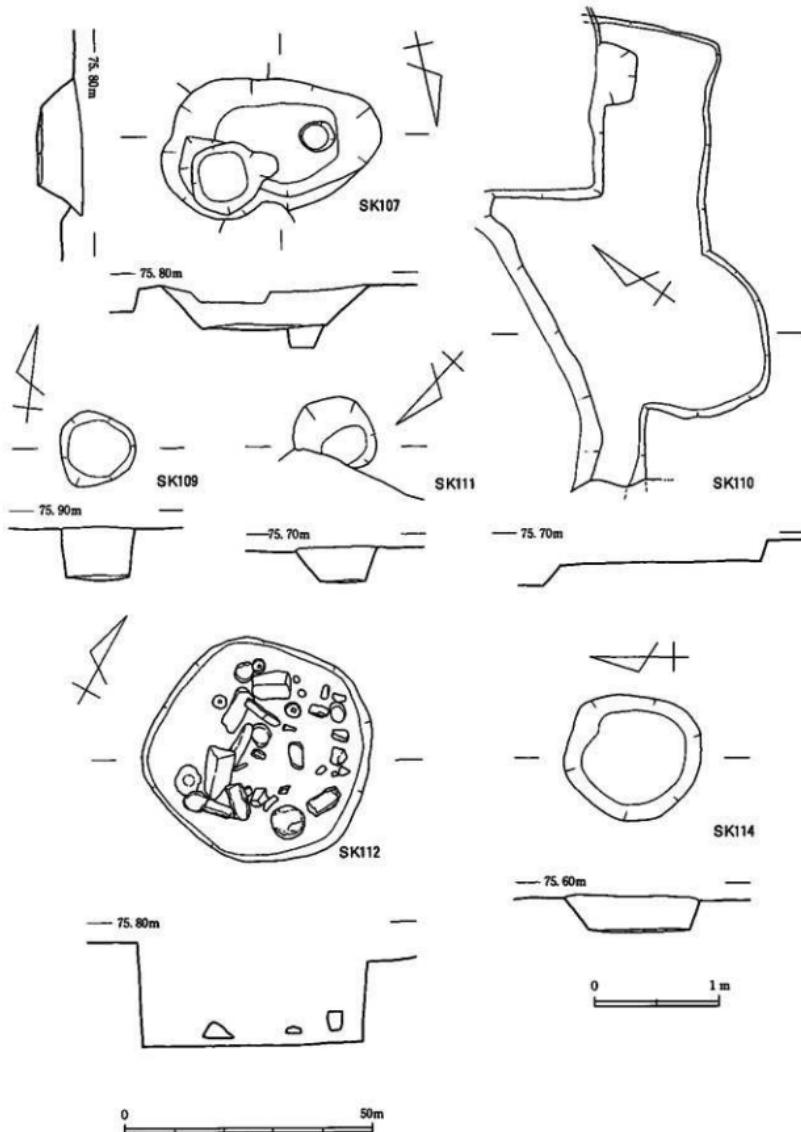
K 1 区南側, 中央部に位置する。SK106から東へ約0.7m離れ, SK108が南東に近接する。規 模は長さ169cm, 幅105cm, 深さ37cmで, 平面形は北側部分が破壊されているが, やや歪な橢円形で ある。長軸方向はN 86° 30' Eである。

SK108 (第11図, 図版 7 f)

K 1 区南側, L 地区に近接する。SK107が北西側に近接している。規模は90×83cm, 深さ21cm で, 平面形がやや歪な円形の土坑である。坑底面には68×66cmで, 幅4cmの桶の痕跡が存在する。



第11図 曽川1号遺跡SK101・102・105・106・108実測図 (1:40)



第12図 鶴川1号遺跡SK107・109~112・114実測図 (1:10, 1:40)

なお、桶の痕跡は底面中央部からやや北側に偏っている。

SK109 (第12図)

K 1 区の南側やや東側に位置する。SK112から南側へ、約 5 m 離れて存在する。検出面での規模は 62×59 cm、深さ 42 cm で、平面形が円形の土坑である。

SK110 (第12図)

K 1 区の南側、ほぼ中央に位置する。北西側を SX25 により破壊される。東西方向 $3.72m + \alpha$ 、南北方向 $1.68m + \alpha$ 、深さ 0.18 m の不定形の土坑である。

SK111 (第12図)

K 1 区の南側、ほぼ中央部に位置する。SX25 から東へ約 0.8 m 離れて存在する。北側は破壊されている。検出面での規模は 71×63 cm + α 、深さ 28 cm で、平面形は概ね円形の土坑である。坑底面は中央部からやや北西側に偏在する。

SK112 (第12図、図版 8 a + 8 b)

K 1 区の南側東端に位置する。SK119 から東へ約 5.7 m 離れている。一边 46 cm、深さ 21 cm の方形の土坑である。本土坑からは底面付近から土師器や陶磁器片に混じって、面子状に丸く面取をした土製品（平瓦・陶器片の転用品、112～118）・古錢（寛永通宝 123・124、不明 125）が出土した。

SK113 (第13図、図版 6 b)

K 1 区の南西側に位置する。SK114 から南へ約 2.4 m 離れたところにある。規模は長さ 202 cm、幅 184 cm、深さ 72 cm で、平面形がやや隅の丸い長方形の土坑である。遺物は須恵器（44）、面子状土製品（119）が出土している。

SK114 (第12図、図版 6 b)

K 1 区のやや南側、西側寄りに存在する。SK115 から東へ約 3.2 m 離れている。規模は 114×102 cm、深さ 24 cm で、平面形がほぼ円形の土坑である。漆喰で被覆されている。

SK115 (第13図、図版 6 b)

K 1 地区のやや南側、西端部付近に位置する。SK114 から西へ約 3.2 m に位置する。検出面での規模は 114×94 cm、深さ 29 cm で、平面形が方形の土坑である。東辺が少し外側に出っ張っている。

SK116 (第13図)

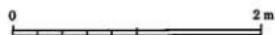
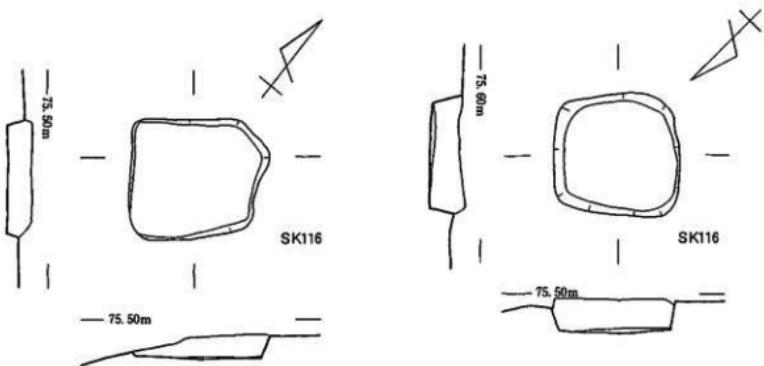
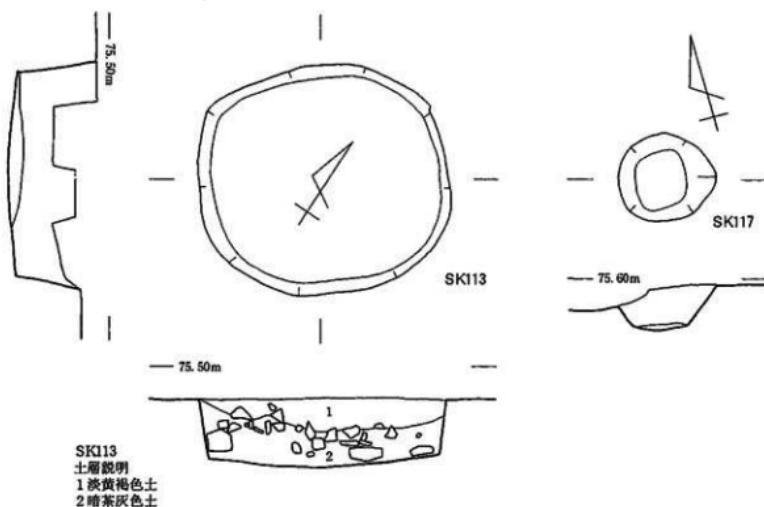
K 1 区の南側、中央部に位置する。SK117 が東側に隣接する。検出面での規模は 78×71 cm、深さ 37 cm で、平面形は方形の土坑である。

SK117 (第13図)

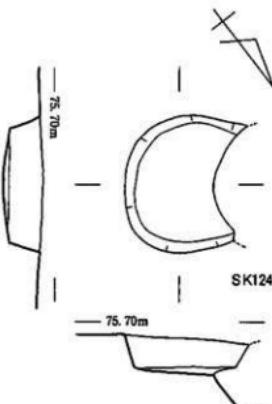
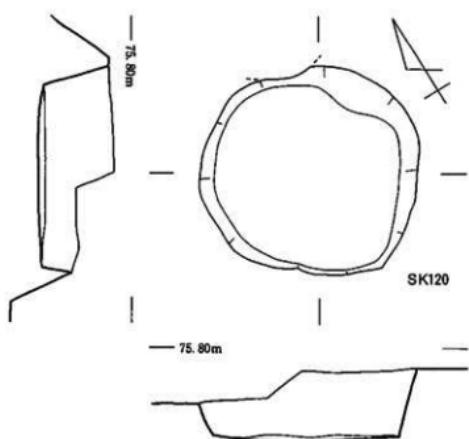
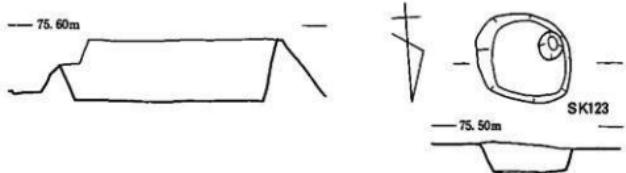
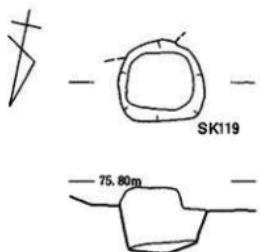
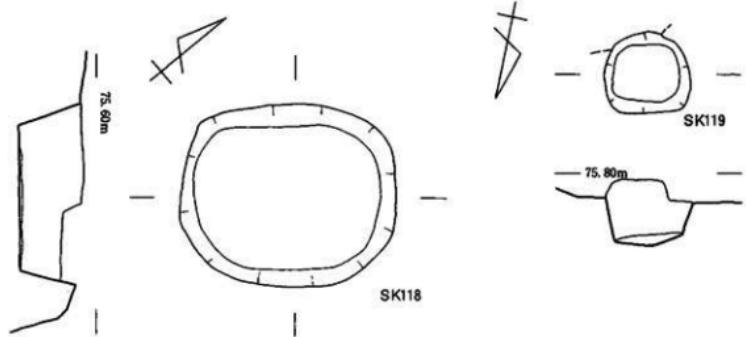
K 1 区の南側、中央部に位置する。SK118 から南へ約 1.5 m 離れており、西側には SK116 が隣接する。規模は 103×97 cm、深さ 19 cm で、平面形が円形の土坑である。坑底面は方形を呈する。遺物は弥生土器（45～53）が出土している。

SK118 (第14図、図版 6 b)

K 1 区のやや南側、中央部に位置する。SK120 から西へ約 3.1 m、SK117 から北へ 1.5 m のとこ

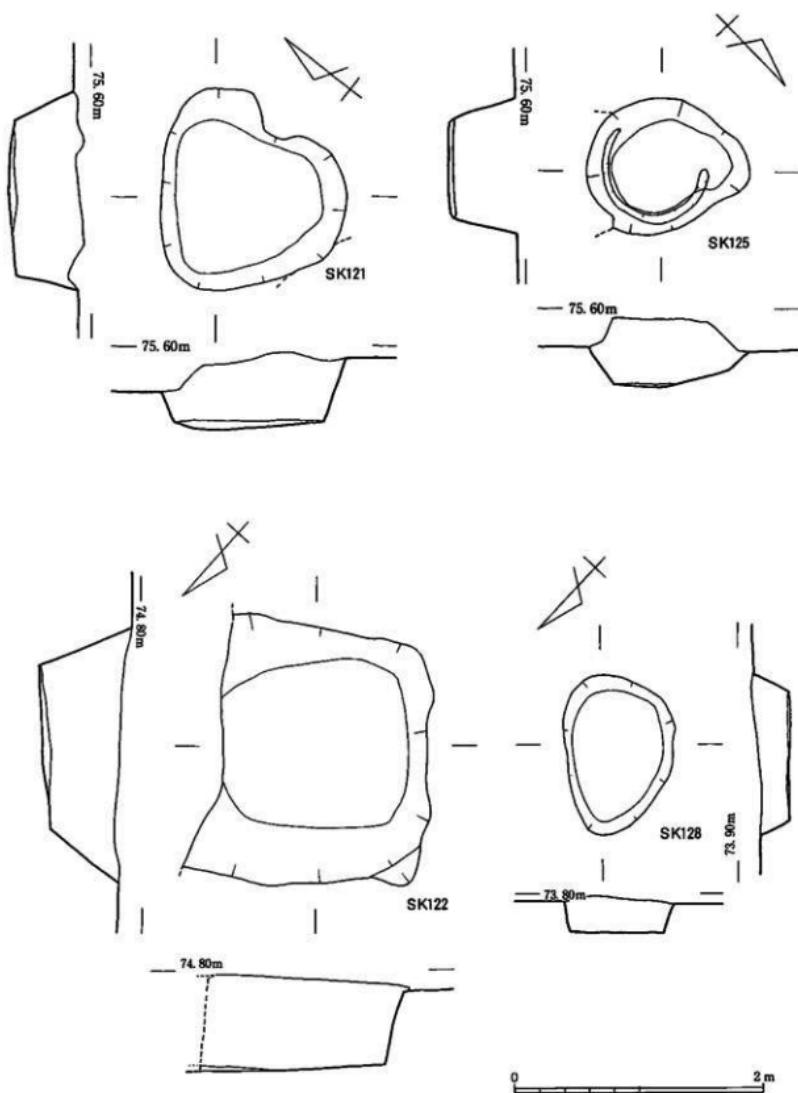


第13図 曽川1号遺跡SK113・115~117実測図 (1:40)



0 2 m

第14図 曽川1号遺跡SK118~120・123・124実測図 (1:40)



第15図 曽川1号遺跡SK121・122・125・128実測図 (1:40)

ろにある。検出面での規模は長さ173cm、幅148cm、深さ49cmで、平面形が隅丸長方形の土坑である。長軸方向はN40°Eである。土坑は漆喰で被覆されている。

SK119 (第14図、図版6 b)

K1区の南側、やや東側寄りに存在する。SK112から西へ約5.7m離れた位置にある。規模は69×65cm、深さ52cmで、平面形は西辺がやや丸みを帯びるもののおおむね方形である。

SK120 (第14図、図版6 c・8 c)

K1区のやや南側、やや東側寄りに存在する。SK121に北接しており、南西約3mにSK118が存在する。検出面での規模は172×165cm、深さ62cmの平面形が円形の土坑である。坑底面には126×120cmの範囲で、厚さ2cmの埋め桶痕跡が巡っている。遺物は弥生土器(54~56)、須恵器(57)が出土している。

SK121 (第15図、図版6 c)

K1区のほぼ中央部に位置する。SK120と南接し、SK120を切っている。規模は160×150cm、深さ57cmで、東側の中央部が破壊されているが、平面形は概ね不整な梢円形と思われる。側壁および底面に厚さ5cmの漆喰が塗れている。遺物は弥生土器(58)、須恵器(59)が出土している。

SK122 (第15図、図版6 c)

K1区のほぼ中央部、L地区に接して存在する。SK124から南側約30cmにある。規模は208×164cm+α、深さ74cmで、平面形が方形になると推定できる土坑である。東側はL地区に延びている。底面は東辺が西辺に比べるとやや短く、西辺を底辺とする台形を呈している。

SK123 (第14図、図版6 c)

K1区のほぼ中央部、東側に存在する。SK124・SK125のすぐ西にあり、SK122から北西に約1m離れている。検出面での大きさは74×70cm、深さ24cmで、平面形は円形である。底面の南北壁際に24×20cm、深さ14cmの小ピットがある。

SK124 (第14図、図版6 c)

K1区のほぼ中央、東端付近に位置する。北側がSK125により破壊され、西側直近にSK123がある。検出面での規模は108×72cm+α、深さ31cmで、平面形は推定の城を出ないが円形と思われる。

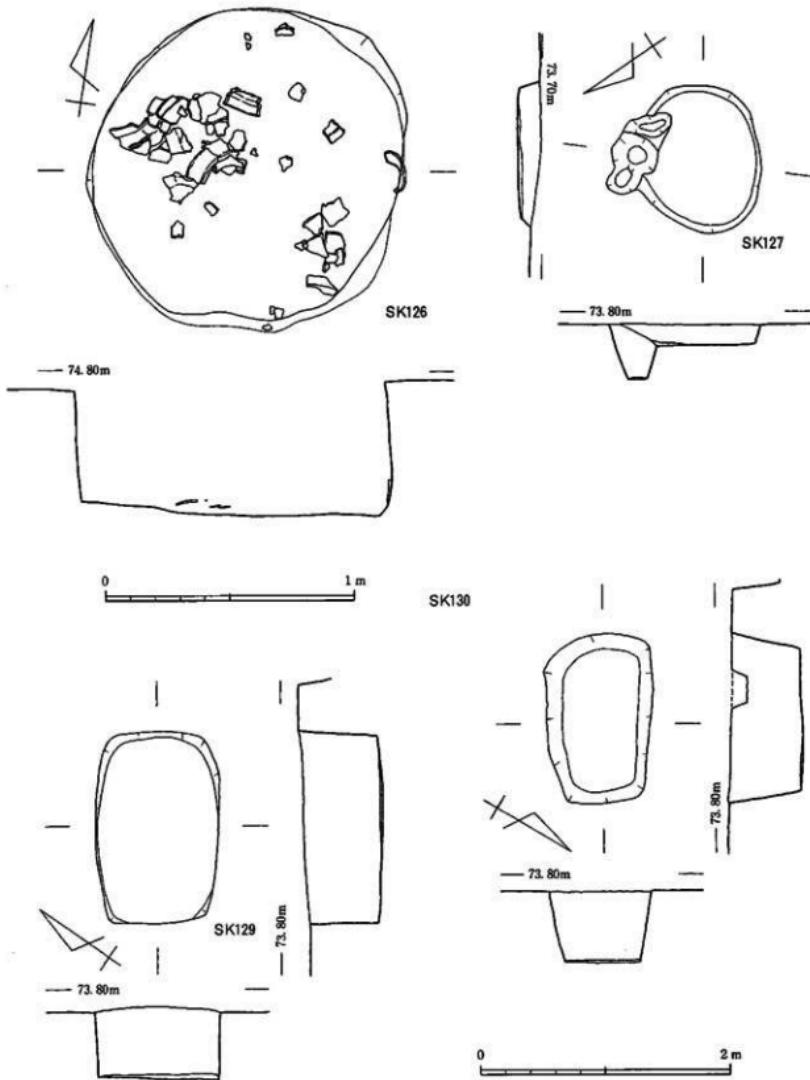
SK125 (第15図、図版8 d)

K1区のほぼ中央部、東端付近に位置する。SK124を切り、SK123と南側で近接する。規模は130×106cm、深さ53cmで、平面形が北側に少し膨らむ不整な梢円形の土坑である。

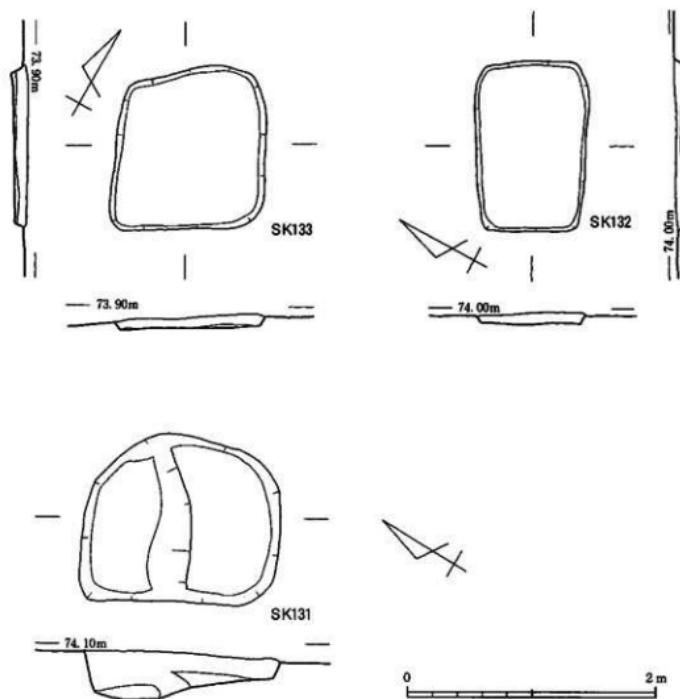
SK126 (第16図、図版8 e, 8 f)

K1区のやや北側、SB15中央部から北東側1期の壁溝を破壊して存在する。検出面での大きさは130×125cm、深さ52cmの平面形がほぼ円形の土坑で、断面形状が底面よりも上部が窄まるフラスコ状を呈している。土層観察等からSB15よりは新しい。

内部には底面や側壁付近から弥生土器(60~72)が出土している。形態等から貯蔵用の土坑と推測できる。



第16図 曽川1号遺跡SK126・127・129・130実測図 (1:20, 1:40)



第17図 善川1号遺跡SK131～133実測図 (1:40)

SK127 (第16図)

K 1 区のやや北側、SB15中央部から北側の壁溝 (1-a) 付近に存在する。規模は112×108cm、深さ17cmで、東側部分をSB15に伴うピットにより破壊されている。上面が削平されたためか、底面までの深さが浅く、遺存状況は不良である。

SK128 (第15図)

K 1 区のやや北側、東端に近い位置にある。SB15の北側、SK130のすぐ東にある。規模は長さ126cm、幅90cm、深さ30cmの平面形が不整な楕円形で、長軸方向はN35° Wである。

SK129 (第16図)

K 1 区のやや北側、中央部に位置する。SB15の北側、SK130のすぐ西にある。規模は長さ152cm、幅99cm、深さ64cmの平面形が長方形の土坑である。長軸方向はN56° 30' Eである。

SK130（第16図）

K 1 区のやや北側、中央部からやや東側に位置する。SB15の北側SK128, SK129の中間にある。規模は長軸136cm, 短軸83cm, 深さ60cmの平面形が長方形の土坑である。主軸方向はN120° 45' Wを指す。坑底面の規模は長さ114cm, 東端幅48cm, 西端幅60cmで西側が東側よりやや大きくなっている。

SK131（第17図）

K 1 区の北側、中央やや東側に存在する。SK132の西側に隣接する。規模は長軸158cm, 短軸129cm, 深さ38cmの平面形がやや歪な長方形の土坑である。南東側に117×65cm, 深さ30cmの台形状の平坦部があり、そこから一段約10cm落ち込んで109cm×54cmの平らな坑底面がある。

SK132（第17図）

K 1 区の北側、東端付近にある。SK131の東側に隣接する。規模は長軸187cm, 短軸88cm, 深さ6cmの平面形が長方形の土坑である。主軸方向はN63° 30' Wを指す。

SK133（第17図）

K 1 区の北側、西端付近に存在する。SK131から西へ約3.3mのところにある。規模は131×121cm, 深さ8cmのほぼ方形の土坑である。

c 溝状遺構

SD19（第18図、図版9 a）

K 1 区の最北部に位置し、南西から北東方向に走る溝状遺構である。遺構の北端部は調査区外に位置していたと考えられるが、一段掘り下げられて不明である。現状の規模は長さ10.65m以上、幅3.44m以上、深さは21cmである。南側の内底面の縁辺沿いに人頭大から一辻30cmほどの角礫が一部石材の現存しない（抜き取られた可能性あり）場所があるものの、1～2段重ねて整然と並べられていた。また、最前列の石材を固定するための控え積みの石材が残っている部分も散見できる。出土遺物には弥生土器（73）、土師器（74・75）、須恵器（76・77）がある。

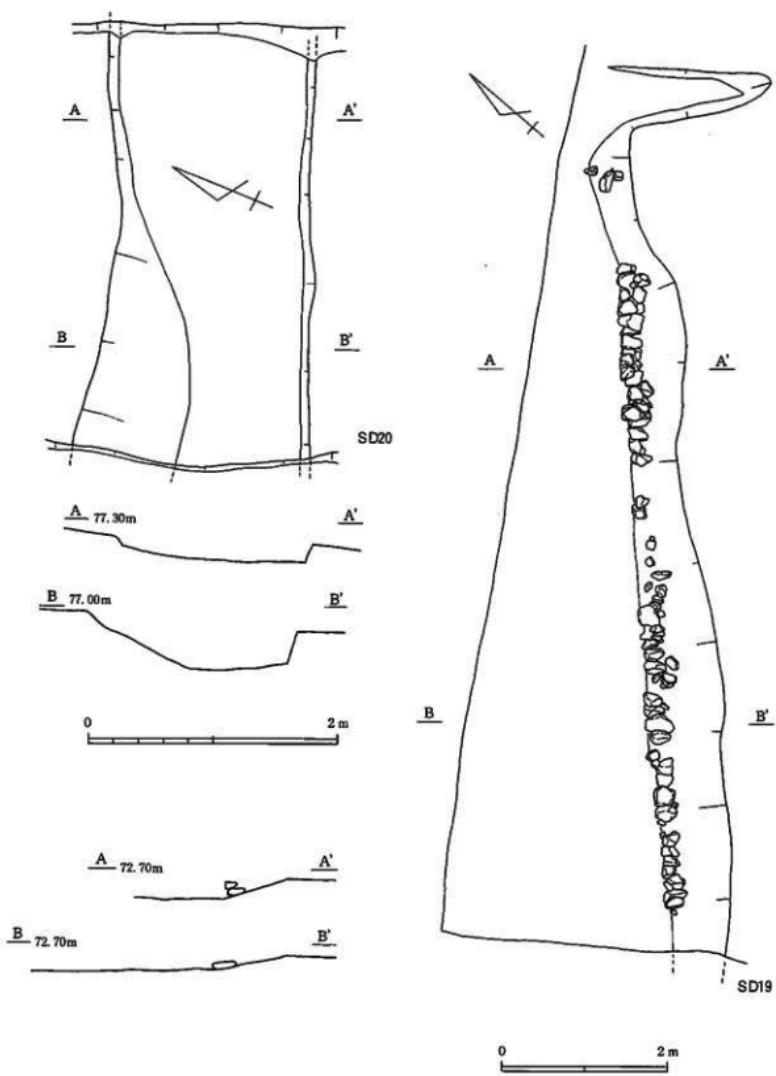
SD20（第18図、図版9 b）

K 3 区南端付近に位置する。SK90から南へ約1m離れて存在する。規模は長さ3.64m以上、幅1.84m、深さ46cmで、東西は調査区外に延びる。底面は東から西へ下る。遺物は縄文土器（78～80）、弥生土器（81・82・84～88）、土師器（83）が出土している。

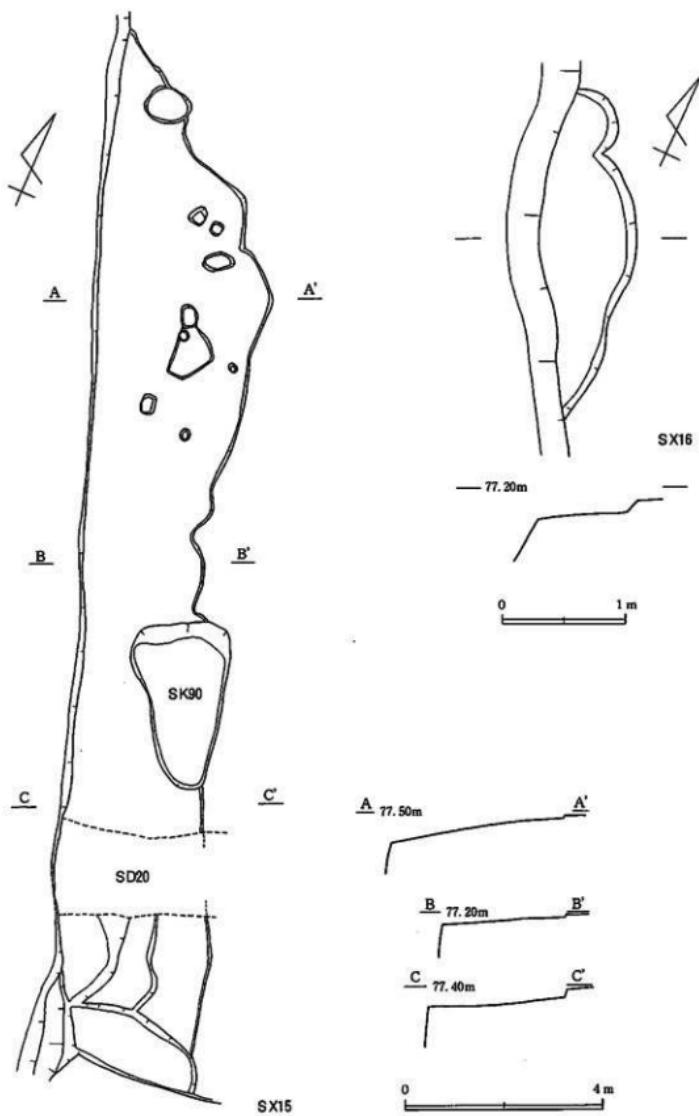
d 性格不明遺構

SX15（第19図、図版9 c）

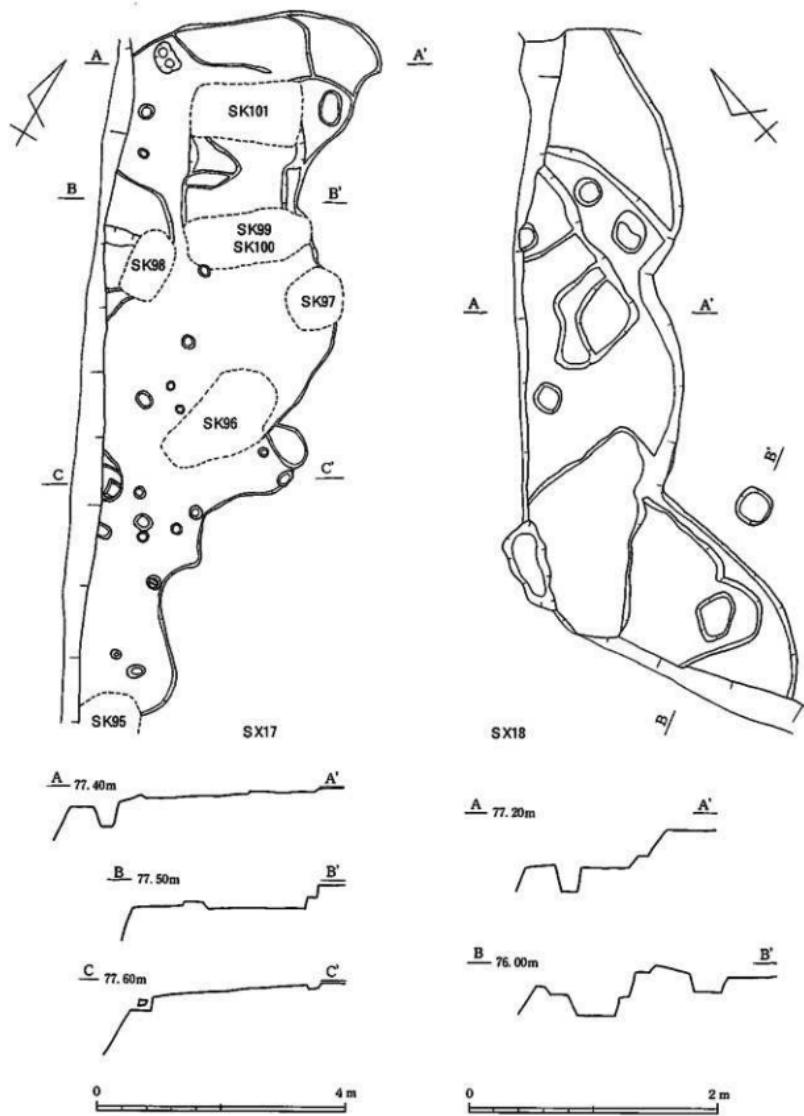
K 3 区南半部に位置する。SK90およびSD20と重複する。規模は長さ20.06m以上、幅3.5m以上、深さは55cmで、遺構の西端部は調査区外に位置していたと考えられるが、一段掘り下げられており詳細は不明である。また、底面は東から西へと傾斜する。遺物は土師器（89）、須恵器（90～94）、土師質土器（95・96）が出土している。



第18図 曽川1号造跡SD19・20実測図 (1:60, 1:40)



第19図 曽川1号遺跡SX15・16実測図 (1:100, 1:40)



第20図 曽川1号遺跡SX17・18実測図 (1:80, 1:40)

SX16 (第19図)

K 3 区中央部西端に位置する。SX15から北へ約3.7m離れて存在する。規模は長さ2.66m以上、幅83cm、深さ16cmと上面が削平されたためか遺存状況は不良である。西半部を欠失しているため全形は不明である。

SX17 (第20図、図版10 a)

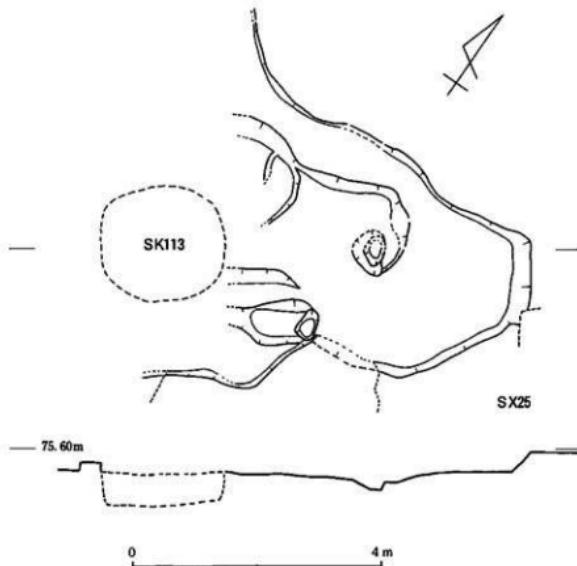
K 2 区中央部からやや南側の西端部に位置する。遺構内もしくは隣接して、SK95～SK101が存在する。規模は長さ11.2m、幅4m以上、深さ48cmである。底面は東南から西北にかけて緩やかに下る。遺物は弥生土器(97～100)が出土している。

SX18 (第20図、図版10 b)

K 2 区最北端に位置する。SK102から北へ約2mの所にある。現状の規模は南北に5.5m、東西に1.3m、深さは一定していないが、13～40cmで、北及び東西の調査区外に延びていたと思われる。底面は北側に緩く下り、所々に径30～20cmほどの小ピットが不規則に配されている。遺物は赤土器(104～109)、土師器(101～103)、須恵器(110)が出土している。

SX25 (第21図)

K 1 区南側、西端部に位置する。SK113を内包する。現状の規模は東西7.69m、南北5.98mで、西侧の調査区外に延びていたと思われる。深さは35cmで、底面は概ね平らで一定している。北側と南側に不定形の落ち込みが存在する。遺物は弥生土器(111)、砥石(120)が出土している。



第21図 曽川1号遺跡SX25実測図(1:80)

(2) 出土遺物

a 概要

遺物は住居跡・土坑・溝状造構・性格不明造構などの造構内出土遺物とこれらの造構とは分離した調査区内出土遺物がある。出土遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器などの土器類が圧倒的に多く、石器などは少ない。このうち、調査区内出土遺物は近世以降のものでかつ小片なので報告を割愛する。遺物は造構毎に報告したが、量的に僅少であった石器や土製品についてまとめて図示した。

b 土器 (1~111, 第22図~第26図, 図版11~13)

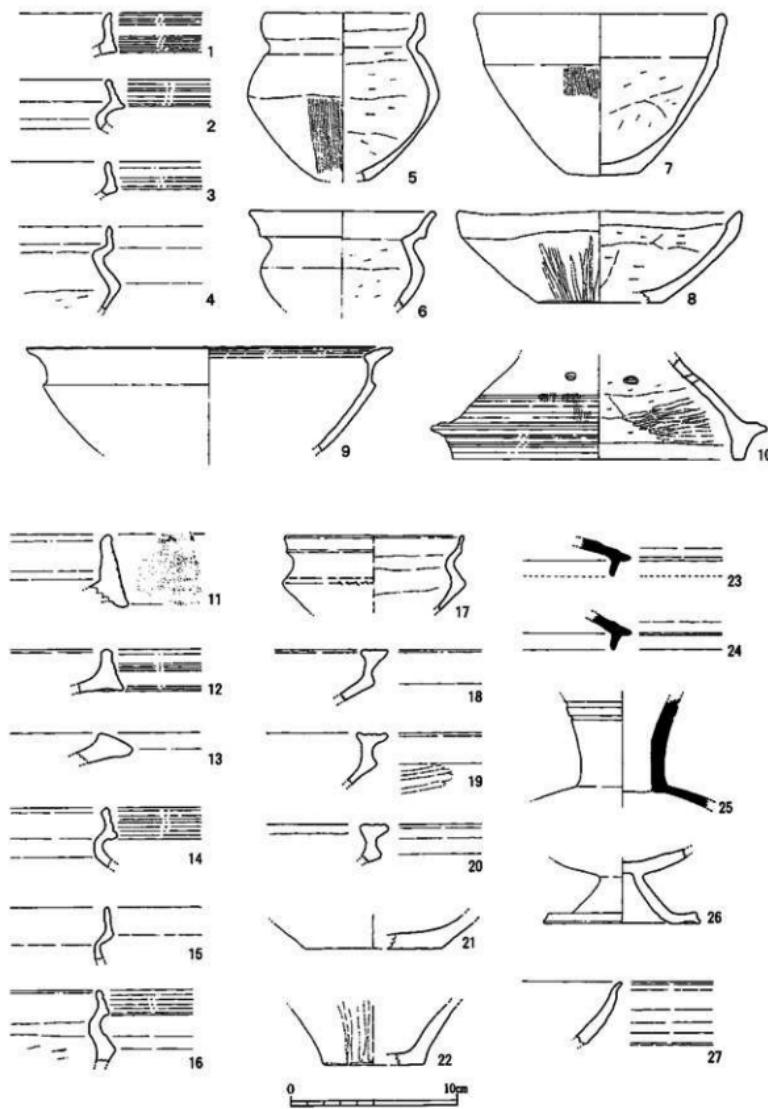
SB15 (1~10, 第22図, 図版11)

弥生土器 (1~5, 7~10)・土師器 (6) が出土している。

1・6は壺形土器である。1は口縁部で、外側に強く開く頸部から内傾気味にほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部は外に若干開き気味に丸くおさめる。外面に多条化した擬凹線を施す。6は胴部下半から口縁部である。胴部はすこし上から押したように最大胴部径が胴部中位から若干上有る球形で、頸部で外側に強く屈曲して口縁部にいたる。口縁部は水平気味に延びた頸部と段をなし、外側斜め上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。胴部内面はヘラ削り後ナデ、口縁部から胴部外面は横方向のナデである。また、口縁部から胴部外面は赤色顔料により塗彩されている。

2・3は甕形土器の口縁部である。2はく字形に緩やかに外側に屈曲する頸部からやや内側斜め上方にまっすぐ延びて、端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。口縁には凹線が3条巡る。3は頸部端から若干内傾してまっすぐ上方に立ち上がり口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部には多条化した擬凹線が巡る。

4・5・7・8は鉢形土器である。4は胴部下半から口縁部である。胴部中位はく字形に弱く屈曲して頸部にいたる。頸部は外側にやや強く屈曲して口縁部にいたる。口縁部はほぼ垂直に短く立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。5は底部付近から口縁部である。底部は平底気味である。胴部は最大径が中位よりも少し上有る洋なし形で最大径部から緩く内側に弧を描いて頸部にいたる。頸部との境に弱い段を持つ。頸部は緩くく字形に屈曲して口縁部にいたる。口縁部は若干内傾気味に短く垂直方向に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。胴部内面はヘラ削り、口縁部から胴部上面はナデ、胴部下半は縦方向のハケメが施される。7はほぼ完形品である。底部は平底気味で、胴部は外側に緩やかに弧を描いて口縁部にいたる。胴部と口縁部の境はごく弱い段となる。口縁部はわずかに外側に開いて上方に延び口縁端部にいたる。口縁端部は肥厚気味に丸くおさめる。底部内面はナデ、胴部内面はヘラ削り、口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケメが施される。8は底部から口縁部である。底部は平底で、胴部は外側斜め上方にまっすぐ延びて口縁部にいたる。口縁部はほぼ垂直に短く立ち上がりやや角張気味の口縁端部にいたる。口縁部断面は三角形である。胴部内面はヘラ削り、口縁部内面はナデ、口縁部外面はヨ



第22図 曽川1号造跡出土遺物実測図1 (1:3)

コナデ、胸部外面はヘラ磨きが施されている。

9・10は高坏である。9は体部下半から口縁部である。体部は外側にハ字形にまっすぐ延びて頸部にいたる。頸部は体部と段をなして短く垂直に立ち上がり口縁部にいたる。口縁部は外側に拡張されて、肥厚する。調整等は遺存状況が悪く不明であるが、口縁部に凹線が3条巡る。10は脚端部から脚柱部下半である。脚柱部は外側にハ字形に延びて脚縁部にいたる。脚縁部は脚柱部境に外側に延びる凸帯状の肥厚部から垂直方向にまっすぐ下方に延びて脚端部にいたる。脚端部は角張る。脚柱部には円形の穿孔がある。脚柱部内面はヘラ削り後一部ヘラ磨き、脚縁部は横方向のナデ、外面には凹線が3条巡る。脚柱部外面はヨコナデで、凹線が3条巡っている。

SB16 (11~26, 第22図, 図版11)

弥生土器 (11~22)・須恵器 (23~25)・瓦質土器 (26) が出土している。

11~13は壺型土器の口縁部である。11は口縁を下方に少し拡張する。口縁部はわずかに内側に傾斜しつつ上方にまっすぐ延びて、口縁端部にいたる。口縁端部はやや角張気味におさめる。外面に円形の押捺文が施される。横方向のナデで調整している。12は外側に強く開いた頸部からわずかに内側に傾斜し、まっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面は幅広の凹線が2条巡り、この凹線に挟まれるように幅の狭い凹線が一条巡る。横方向のナデで調整している。13は口縁の端部を上下方向に拡張し、外側に傾斜する端面となっている。断面は三角形状である。横方向のナデで調整している。

14・15は甕形土器である。14は頸部から口縁部である。頸部はく字形に外側に弧を描くように屈曲して口縁部にいたる。口縁部はやや内側に傾斜してまっすぐ上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は角張気味である。外面を凹線が3条巡る。外面は横方向のナデで、ススが付着する。15は頸部上半から口縁部である。頸部は外側に短く屈折して口縁部にいたる。口縁部は上方に垂直気味に立ち上がって口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。横方向のナデで調整している。

16・17は鉢形土器である。16は胴部上半から口縁部である。胴部は最大径のところで屈折し、頸部境と段をなす。頸部は緩くく字形に屈曲して口縁部にいたる。口縁部は内側に少し傾斜しつまっすぐ上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面には凹線が2条巡る。胴部内面はヘラ削り、頸部から口縁部はナデ、胴部外面は横方向のナデである。17は胴部下半から口縁部である。底部から外側に開き気味に延びて最大胴部で内側に屈曲し、稜をなす。稜上には短沈線が一定の間隔で巡る。頸部はく字形に緩く屈曲して、口縁部にいたる。口縁部はわずかに外側に開き気味に上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。

18~20・26は高坏である。18~20はいずれも口縁部である。18は外側に延びた体部から、わずかに外側に開き気味に上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は水平方向に拡張され、端面をなす。横方向のナデで調整している。19は斜め外側上方に延びた体部から、ほぼ垂直に上方に延びて、口縁端部にいたる。口縁端部は水平方向の拡張され端面をなす。体部内面から口縁端部まではナデ、口縁部外面は横方向のナデ、体部はヘラ磨きである。20は体部端から垂直にまっすぐ

延びて口縁端部にいたる。口縁端部は水平方向の拡張され、端面をなす。横方向のナデで調整している。26は脚部から体部下半である。脚柱部はハ字形に外側に広がり脚端部付近で水平方向に屈曲する。脚端部は尖り気味におさめる。体部は外側に緩やかに延びる。摩滅のため調整等は不明である。

21・22は底部から胸部下半である。いずれも平底である。21は胸部が比較的緩く外側斜め上方に開く。調整等は不明である。22は胸部が外側斜め上方に強く立ち上がる。底部外面および内面はナデ、胸部外面はヘラ磨きである。

23・24は杯蓋で、いずれも口縁部である。23は緩やかに下方に延びた天井部から口縁部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。やや内側に傾斜するかえりを持つ。24は緩やかに下方に延びた天井部から口縁部にいたる。口縁端部は若干尖り気味に丸くおさめる。やや内側に傾斜するかえりを持つ。

25は壺瓶で、胸部上半から頸部である。胸部上半はやや肩が張っており、頸部との境に明瞭な稜をなす。頸部は中位まではほぼ垂直気味に上方に延びて、中位から少し外側上方に開き気味になる。上位に2条の沈線が巡る。

SB17 (27, 第22図)

土坑内 (SK104) から天目茶碗 (27) が出土している。体部上半から口縁部である。体部は緩やかに外側斜め上方に延びて、口縁部にいたる。口縁部は端部付近で短く字形に屈曲して口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。淡い黒褐色の釉がかかること。

SK92 (第23図、図版11)

縄文土器 (28)、弥生土器 (29・30) が出土している。

28は深鉢の口縁端部である。口縁部は外側斜め上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部はやや角張気味におさめる。口縁部外面を外方向に肥厚させ、沈線と縄文 (RL) からなる文様帶 (磨消縄文) を作り出す。肥厚部より下の外面と内面は条痕で調整される。

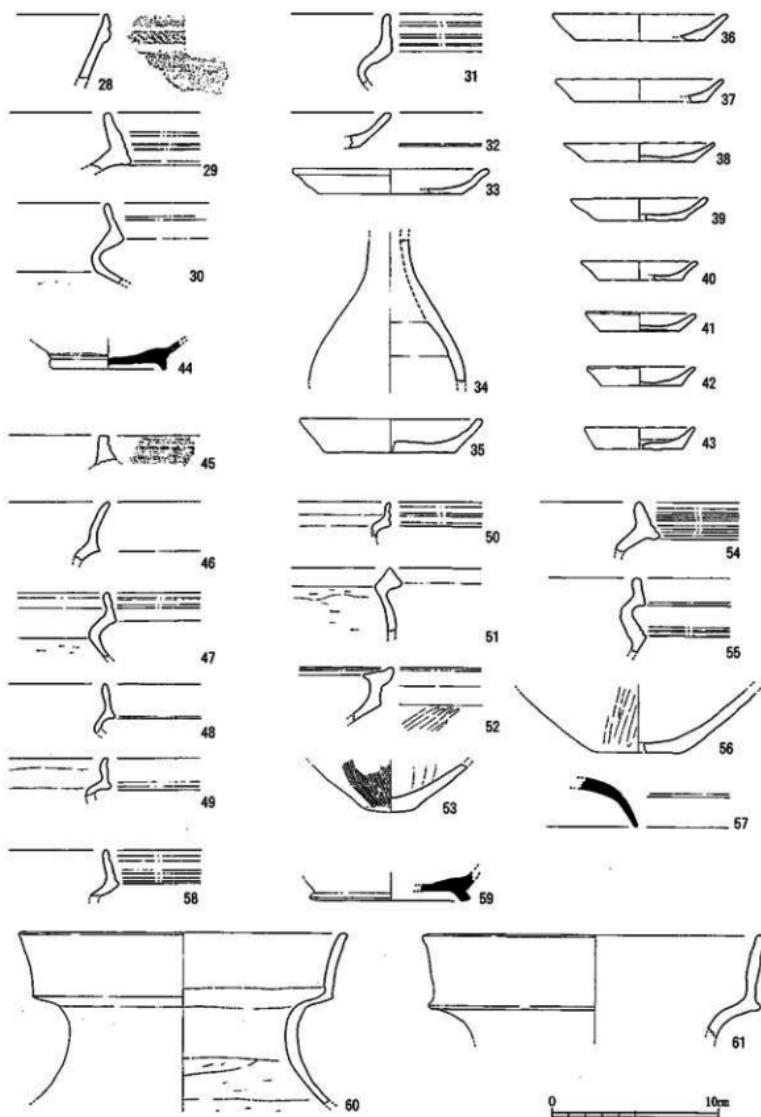
29は壺形土器の口縁部である。やや内側へ傾斜しつつまっすぐ上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面に2条の凹線が巡る。摩滅が激しいので調整等は不明である。

30は壺形土器の頸部から口縁部である。頸部はく字形に屈曲し、やや外側に肥厚しつつ口縁部にいたる。口縁部は少し内側に傾きながら上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は少し尖り気味におさめる。口縁部に少なくとも数条の凹線が巡ると思われるが、遺存状況が悪く、観察できるのは1条のみである。

SK102 (第23図、図版11)

弥生土器 (31)、土師質土器 (32・33) が出土している。

31は壺形土器である。頸部上半から口縁部である。頸部はく字形に強く屈曲し、口縁部との境付近で外側に肥厚する。口縁部は垂直に上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面に凹線が3条巡る。横方向のナデで調整している。



第23図 曽川1号遺跡出土遺物実測図2 (1:3)

32・33は皿である。32は底部から口縁部である。底部は平底で、体部がハ字形に外側斜め上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。底部外面はヘラ切り、体部外面と内面は回転ナデである。33は底部から口縁部である。底部は平底で、体部は斜め外上方にやや内側に傾きながら口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。底部外面はヘラ切り、内面および体部外面は回転ナデで、内面中央部に定方向のナデがある。回転方向は時計回りである。

SK104 (第23図、図版11)

陶器 (34)、土師質土器 (35~43) が出土している。

34は長頸壺である。胴部上半から頸部である。胴部は倒卵形で、内側に傾いて頸部にいたる。頸部は垂直方向にわずかに内側に傾きつつ延びる。頸部から胴部にかけての内面で器表の剥落が著しい。二次焼成を受けた可能性が高い。

35~43は皿である。35は底部から口縁部である。底部は平底で、体部はハ字形に外側斜め上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。底部外面はヘラ切り、板目が付く。体部は回転ナデ、底部内面に定方向のナデがある。36は底部から口縁部である。底部は平底と思われる。体部はハ字形に外側斜め上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。底部には板目が残っている。体部は回転ナデである。37は底部から口縁部である。底部は平底と思われる。体部はハ字形に外側斜め上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ切り、体部は回転ナデ、底部内面に定方向のナデがある。38は底部から口縁部である。底部は平底である。内面中央部が少し盛り上がる。体部はハ字形に外側斜め上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。底部は糸切りで、板目が残る。体部および底部内面は回転ナデである。39は底部から口縁部である。底部は平底である。体部はハ字形に外側斜め上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。底部は糸切りで、体部は回転ナデ、底部内面に定方向のナデがある。40は底部から口縁部である。底部は平底である。体部はハ字形に外側斜め上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ切り、体部および底部内面は回転ナデである。41は底部から口縁部である。底部は平底で、中央部がほんの少しくぼむ。体部はハ字形に外側斜め上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。底部は糸切りで、体部は回転ナデ、底部内面に定方向のナデがある。42は底部から口縁部である。底部は平底である。体部はハ字形に外側斜め上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。底部は糸切りで、体部は回転ナデ、底部内面に定方向のナデがある。43は底部から口縁部である。底部は平底である。体部はハ字形に外側斜め上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。底部は糸切りで、板目が付いてる。体部と底部内面は回転ナデである。

SK113 (第23図)

須恵器碗 (44) が出土している。高台付きの底部である。底部は平底で、高台は断面が角の純い台形である。底部外面はヘラ切りで、高台は貼り付け、体部及び底部内面は回転ナデである。

SK117 (第23図、図版11)

弥生土器 (45~53) が出土している。

45は壺形土器の口縁部である。二重口縁の口縁部と思われる。外面に鰐歯文が沈線で描かれている。横方向のナデで調整している。

46~50は壺形土器である。46は頸部上半から口縁部である。頸部はく字形に緩く屈曲し口縁部にいたる。頸部と口縁部の境に稜を持つ。口縁部は外側上方に外湾しつつ口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。横方向のナデで調整している。47は頸部から口縁部である。頸部はく字形に緩く屈曲して口縁部にいたる。口縁部は内側上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。内面頸部下半はヘラ削り、内面頸部上半から口縁部は横方向のナデである。口縁部外面には沈線が二条巡る。48は頸部上半から口縁部である。頸部はく字形に屈曲して口縁部にいたる。口縁部との境に稜がある。口縁部はほんの少し内側に傾斜しつつまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。外面は横方向のナデで、内面は不明である。49は頸部上半から口縁部である。頸部は強く外側に屈曲し口縁部にいたる。口縁部はほぼ垂直に上方に立ち上がって口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。横方向のナデで調整している。50は頸部上半から口縁部である。頸部は強く外側に屈曲し口縁部にいたる。口縁部はほぼ垂直に上方に立ち上がって口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面には2条の凹線がある。横方向のナデである。

51は鉢の胴部中位から口縁部である。胴部は内側に緩やかに弧を描いて口縁部にいたる。口縁部はハ字形に外側に短く開く。口縁端部は上下方向に拡張され、端面をなす。胴部内面はヘラ削り、口縁部から胴部上半外面は横方向のナデで調整される。

52は高坏の体部上半から口縁部である。体部はハ字形に開いて口縁部にいたる。口縁部はほぼ垂直に上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は水平方向に拡張され、端面をなす。端面から口縁部外面は横方向のナデ、体部外面はヘラ磨きである。

53は底部から胴部下半である。底部は平底気味であるが、中央部が少し外側に出る。体部は緩く外側上方に延びる。底部外面はナデ、体部外面はハケメ、内面はナデである。

SK120 (第23図)

弥生土器 (54~56)、須恵器 (57) が出土している。

54は壺形土器の頸部上半から口縁部である。口縁部は下方に拡張され、やや内側に傾きながらまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面に凹線が4条ある。口縁部は横方向のナデで調整されている。

55は鉢形土器の胴部中位から口縁部である。胴部中位でく字形に屈折する。屈折部に2条の凹線がある。頸部は緩く外反して口縁部にいたる。口縁部は若干内側に傾いてまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。内面と胴部外面上半は横方向ナデである。

56は底部から胴部下半である。底部は平底で、体部は緩く外上方に延びる。体部外面にハケメがある。

57は杯蓋である。天井部から緩やかに弧を描いて口縁部にいたる。口縁部との境に沈線がある。口縁部は外側下方に少しだけ開き気味に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は少し角張り気味におさめる。

SK121 (第23図)

弥生土器 (58)・須恵器 (59) が出土している。

58は壺形土器の口縁部である。口縁部は若干内側に傾斜しつつ上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面には凹線が3条ある。横方向のナデで調整している。

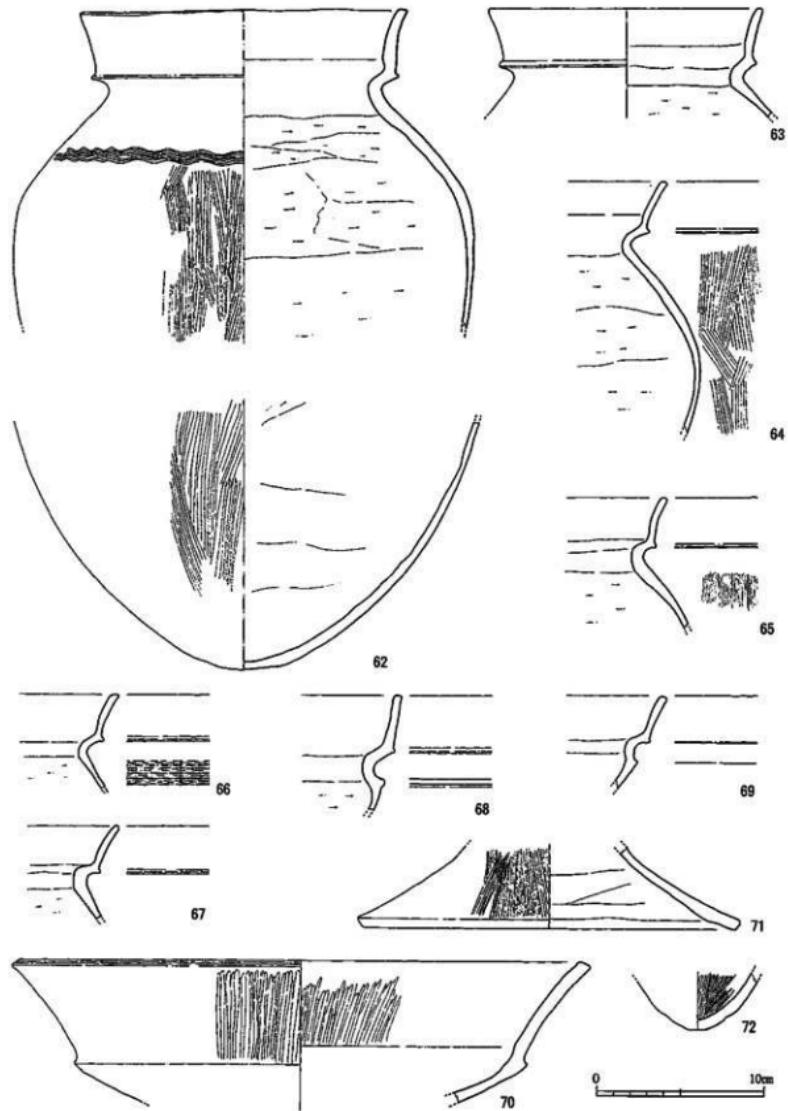
59は椀である。高台付きの底部である。底部は平底で、断面が台形の高台が付く。底部外面はヘラ切りで、高台は貼り付け、体部は回転ナデ、底部内面に定方向のナデがある。

SK126 (第23・24図、図版11・12)

土師器 (60~72) が出土している。

60~61は壺形土器である。60は頸部から口縁部である。頸部は緩く外反しつつ口縁部付近で強く外側に開く。口縁部はわずかに外傾しつつ上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。頸部下半内面はヘラ削り後ナデ、頸部上半内面から頸部外面は横方向のナデで調整している。61は頸部上半から口縁部である。頸部は強く外側に開いて口縁部にいたる。口縁部との境は肥厚し段状になっている。口縁部はわずかに外側に開いて上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は角張っている。横方向のナデで調整している。

62~67は壺形土器である。62は底部から口縁部である。底部はわずかに平底気味である。胴部は最大径が胴部の中位より少し上に位置する倒卵形である。頸部との境に波状文が巡る。頸部は短くく字形に屈曲して口縁部にいたる。口縁部との境に段をなす。口縁部はわずかに外側に開きつつ立ち上がり中位からさらに外側に開いて口縁端部にいたる。口縁端部は角張っている。胴部内面はヘラ削り、頸部～口縁部内面はヨコナデ、胴部はハケメである。63は頸部から口縁部である。頸部はく字形に短く屈曲して口縁部にいたる。口縁部との境に段を持つ。口縁部は若干外側に開きつつ上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は少し角張る。頸部内面下半はヘラ削り、頸部内面上半から頸部外面まではヨコナデである。64は胴部下半から口縁部である。胴部は球胴形で、頸部はく字形に短く屈曲して口縁部にいたる。口縁部との境に段を持つ。口縁部は外側斜め上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は少し角張っている。胴部内面はヘラ削り、頸部内面から頸部外面はヨコナデ、胴部外面は縦方向のハケメである。65は胴部上位から口縁部である。頸部はく字形に短く屈曲して口縁部にいたる。口縁部はわずかに外側に外湾しながら上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。胴部内面はヘラ削り、頸部および口縫部はヨコナデ、胴部外面は縦方向のハケメである。66は胴部上半から口縁部である。頸部はく字形に屈曲して口縁部にいたる。口縁部との境に凸帯状の段を持つ。口縁部は外湾気味に上方に延び、外側に少し開いて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。頸部内面下半はヘラ削り後ナデ、口縫部は横方向のナデ、頸部外面は横方向のハケメである。67は頸部から口縫部である。頸部は口縫部付近で外側に強く開く。口縫部境に段を持つ。口縫部は外側斜め上方に若干外反気



第24図 曽川1号遺跡出土遺物実測図3 (1:3)

味に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。頸部内面下半はヘラ削り、頸部内面上半から口縁部及び頸部外面はヨコナデである。

68・69はいずれも鉢形土器の胴部上半から口縁部である。68は胴部と頸部の境に凸帯状の段を持つ。頸部は緩い半円状で、口縁部はわずかに外側に開き気味にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は角張気味におさめる。胴部内面はヘラ削り、頸部内面から口縁部内面はヨコナデである。69は胴部と頸部の境に段を持つ。頸部は短く半円状に屈曲し口縁部にいたる。口縁部は外側斜め上方にほぼまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。調整は不明である。

70・71は高坏である。70は体部上半から口縁部である。体部は緩やかに外上方に開き気味にのびて、口縁部にいたる。口縁部境に段を持つ。口縁部は外上方に開き気味に外湾して、口縁端部にいたる。口縁端部は角張り、端面をなす。体部内面はナデ、口縁部内面はヘラ磨き後ナデで、端部はナデ、口縁部外面はヘラ磨きである。71は脚部である。脚部はハ字形に強く広がって脚端部にいたる。脚端部は角張って、端面となっている。脚部内面はヘラ削り、脚端部付近から脚端部はヨコナデ、脚部外面はハケメである。

72は底部～胴部下半である。外面底部中央にわずかに平坦な部分が残る、尖り気味の丸底である。胴部は外側に上方に弧を描いて延びる。内面はハケメが残っている。

SD19 (第25図、図版12・13)

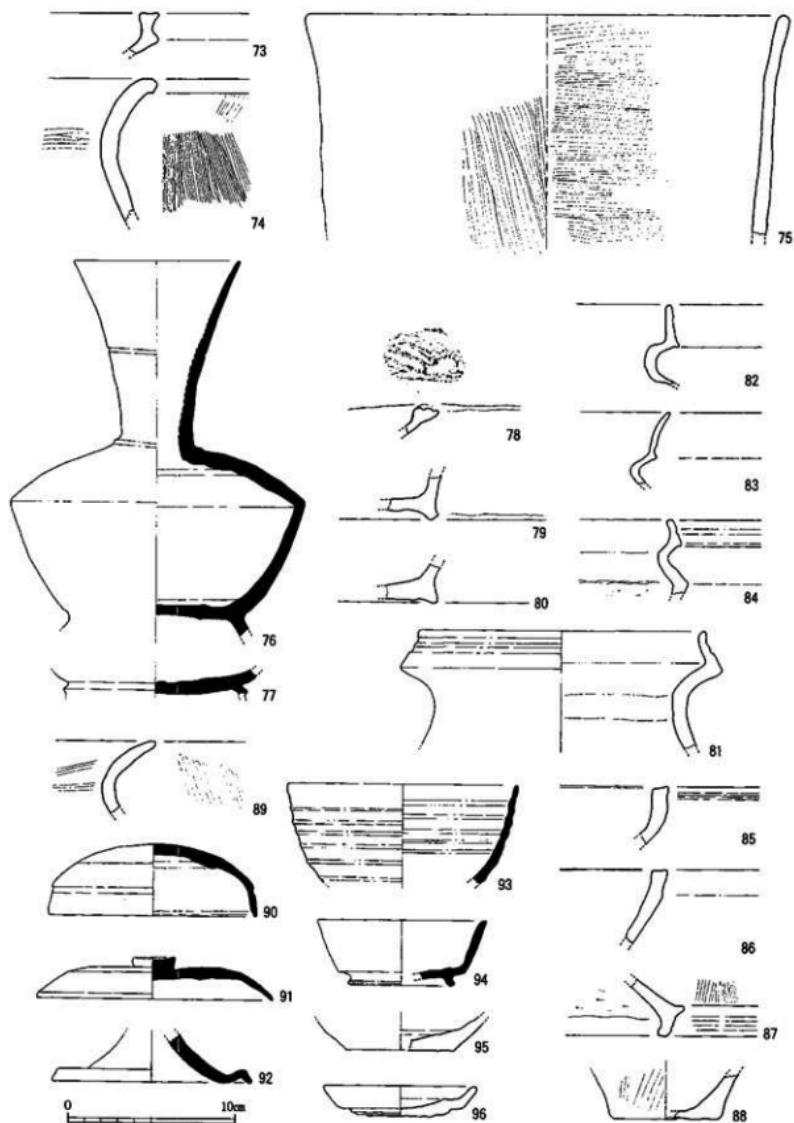
弥生土器 (73)、土師器 (74・75)、須恵器 (76・77) が出土している。

73は高坏の口縁部である。外上方に延びる体部から短く垂直に立ち上がり口縁端部にいたる。口縁端部は水平方向に肥厚させ端面をなす。体部内面は横方向のナデで調整している。遺存状況が不良のためそのほかの部分については不明である。

74・75は瓶である。74は口縁部である。口縁部は緩く外反して上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は外側を少し肥厚させる。内面の一部にハケメがある。外面は肥厚部直下がヨコナデで、以下ハケメである。75は胴部上半から口縁部である。胴部はほんの少しだけ外側にいて上方に延びて口縁端部にいたる。口縁部は少し外側に開いて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。内面は横方向のハケメ、外面は口縁部がヨコナデ、胴部が縦方向のハケメである。

76は長頸壺の底部から口縁部である。底部は平坦な平底で、高台が付く。胴部は斜め外上方にほぼまっすぐ延びて最大径部にいたり、ここで稜をなす。胴部上半は内側へハ字形に窄まり気味に延びて頸部にいたる。頸部はほぼ垂直気味に上方に延び、頸部中位や上方に沈線が一条巡る。口縁部は若干外側に開き気味にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。底面内面に緑色の自然釉が付着する。高台は貼り付けである。

77は杯身の底部である。ほぼ平坦な底部で、高台が付く。高台には段があり、端部は消失している。底部内面中央には定方向のナデ、体部付近は回転ナデ、底部外面は中央がナデ、周辺はヘラ削りである。高台は貼り付けによる。



第25図 曽川1号遺跡出土遺物実測図4 (1:3)

SD20 (第25図, 図版13)

縄文土器 (78~80), 弥生土器 (81・82・84~88), 土師器 (83) が出土している。

78は深鉢の口縁部である。端部は水平方向および上部に肥厚している。肥厚した口唇部には口縁に沿って沈線が巡る。遺存状況が不良のため調整等は不明である。

79・80は底部である。79は平底に断面台形状の高台が付いたようなくぼみ底となっている。底部および胴部内面はナデ, 胴部外面は条痕文である。80は底部中央が少しへこむくぼみ底となっている。遺存状況が不良のため調整等は不明である。

81・82は壺形土器である。81は頸部から口縁部である。頸部は緩やかに外反して口縁部にいたる。口縁部は斜め内側上方へまっすぐ立ち上がり, 端部付近で垂直になり, 口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面には凹線が2条巡る。口縁部から頸部の外面はヨコナデである。82は頸部から口縁部である。頸部は半円状に屈曲し口縁部にいたる。口縁部はほぼ垂直にまっすぐ上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。頸部内面はナデ, 口縁部内面はヨコナデである。

83は壺形土器の頸部上半～口縁部である。頸部はく字形に屈曲して口縁部にいたる。口縁部は外側に外反気味に延びて口縁端部にいたる。口縁端部はやや尖り気味におさめる。遺存状況が不良のため調整等は不明である。

84は鉢形土器の胴部から口縁部である。胴部は最大径部で屈折して稜をなす。頸部はゆるくく字形に屈曲して口縁部にいたる。口縁部はやや内側上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は角張気味におさめている。口縁部外面には凹線が1条巡る。胴部内面下半がヘラ削り, 同部内面上半から口縁部にかけてはナデ, 頸部外面はヨコナデである。

85~87は高坏である。85は体部から口縁部である。体部は外側上方にのび, 口縁部は垂直に立ち上がって口縁端部にいたる。口縁端部は角張り, 少しくぼむ端面をなす。口縁端部直下には擬凹線が数条存在する。口縁部外面はヨコナデである。86は体部から口縁部である。体部は外側斜め上方にまっすぐ延びる。口縁部はわずかに内側に傾きを変えて口縁端部にいたる。口縁端部は角張っており, 端面をなす。遺存状況が不良のため調整等は不明である。87は脚部である。ハ字形に外側に延びて脚縁部にいたる。脚部と脚縁部の境には凸帯状の段がある。脚縁部はやや内側に傾きながら下方に延びて脚端部にいたる。脚縁部外面には凹線が数条巡る。脚端部は角張気味におさめている。脚部内面はヘラ削り, 脚縁部はヨコナデ, 脚部外面はヘラミガキである。

88は底部で, 平底である。体部は外側斜め上方直線的に立ち上がる。底部外面中央はナデ, 胴部外面はハケメである。

SX15 (第25図, 図版13)

土師器 (89), 須恵器 (90~94), 土師質土器 (95・96) が出土している。

89は壺形土器の頸部上半から口縁部である。頸部は緩くく字形に屈曲する。口縁部は斜め上方に外反しつつまっすぐ延びる。口縁部は中位で内面が少し肥厚する。口縁端部は丸くおさめる。頸部内面はナデ, 口縁部内面は横方向のハケメ, 外面は縦方向のハケメである。

90・91は杯蓋である。天井は丸く内側に弧を描きながら口縁部にいたる。口縁部は若干外に開き気味にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。天井部外面はヘラ切り、口縁部は回転ナデ、天井部内面中央には定方向のナデである。91は天井の中央に扁平な中央部が少しくぼむボタン状のつまみが付く。天井部は平坦で、少し斜め外側にまっすぐ延びて、口縁端部にいたる。口縁端部は尖り気味におさめる。天井部外面はヘラ削り、口縁部は回転ナデ、天井部内面には定方向のナデがある。

92は高坏の脚部である。脚部はハ字形に外側に広がり、脚縁部付近で反転する。脚縁部は短く垂直に延びる。端部は丸くおさめる。脚部内面には絞り目、外面は回転ナデである。

93・94は椀である。93は椀の体部下半から口縁部である。体部は外側上方に緩やかな弧を描いて口縁部にいたる。口縁部はわずかに外側に開いてまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。94は底部から口縁部である。底部は平底で、断面台形の高台が付く。体部は外側上方へ直線的に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。

95・96は皿である。95は底部から体部である。底部は平底で、体部は外側上方に緩やかに開く。底部外面はヘラ切り、そのほかは回転ナデである。96は底部から口縁部である。底部は平底、体部は短く外側上方に延びる。口縁端部は丸くおさめる。底部は糸切りで、他は回転ナデである。

SX17 (第26図)

弥生土器 (97~100) が出土している。

97・98は壺形土器である。97は口縁部で、外側に少し外反して口縁端部にいたる。口縁端部は上下に拡張し、端面となっている。端面には凹線が2条巡る。内外面ともに横方向のなでである。98は頸部上半から口縁部である。頸部は半球状に屈曲して口縁部にいたる。口縁部はほぼ垂直に短く上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。口縁部外面には凹線が3条巡る。横方向のナデで調整している。

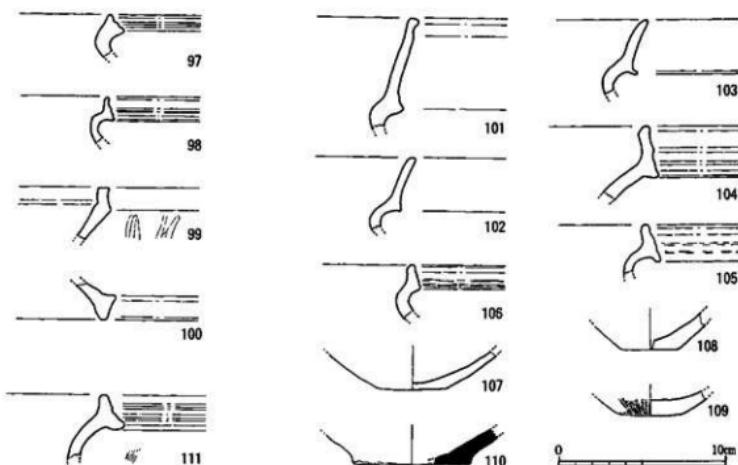
99・100は高坏である。99は体部から口縁部である。体部は外側上方に延びる。口縁部は短く垂直に立ち上がり口縁端部にいたる。口縁端部は角張っており、端面をなす。内面および口縁部外面はヨコナデ、体部外面はヘラミガキである。100は脚縁部である。脚端部が外側に肥厚している。脚部境と段をなす。

SX18 (第26図)

弥生土器 (104~109)、土師器 (101~103)、須恵器 (110) が出土している。

101・104・111は壺形土器である。101は口縁部である。頸部と口縁部の境に稜を持つ。口縁部はやや外側に開いて上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は角張気味におさめる。口縁端部直下が凹線状にくぼむ。横方向のナデで調整している。104は頸部上半から口縁部である。頸部は外側に緩やかに開く。口縁部との境に段を持つ。口縁部は下方に若干拡張され、わずかに内傾してまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は角張り気味におさめる。口縁部外面に凹線が3条巡る。

102・103・105・106は壺形土器である。102は頸部上半から口縁部である。頸部は半球状に屈曲



第26図 倭川1号追跡出土遺物実測図5 (1:3)

して口縁部にいたる。口縁部は外側上方にやや開き気味にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は少し角張り気味におさめる。横方向のナデで調整している。103は頸部上半から口縁部である。頸部は半球状に屈曲して口縁部にいたる。口縁部との境に小さな凸帯がつく。口縁部は外側斜め上方にやや開き気味にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面はヨコナデである。105は頸部上半から口縁部である。頸部は半球状に強く外側に屈曲して口縁部にいたる。口縁部は下方に拡張され、やや斜め内側上方へ短く延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面には擬凹線が3条巡る。ヨコナデで調整している。106は頸部上半から口縁部である。頸部は緩やかにく字形に屈曲して口縁部にいたる。口縁部はやや内側上方に傾斜して短く立ち上がって口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面には擬凹線が3条巡る。横方向のナデで調整している。

107は底部から胴部下半である。底部は平底で、胴部は緩やかに外側に延びる。108は底部である。底部は平底で、斜め上方へ胴部が延びる。109は底部である。平底であるが、外面中央部にかけてほんの少しおみを帯びる。110は腕の底部から体部である。底部は平底で、体部はハ字形にやや開き気味にまっすぐ延びる。底部外面はヘラ切りで、そのほかは回転ナデである。

SX25 (第26図)

弥生土器(111)が出土している。111は壺形土器の頸部上半から口縁部である。頸部は緩やかに外側に屈曲しつつ口縁部にいたる。口縁部は下方に拡張され、頸部との境が肥厚する。垂直に短く立ち上がり口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面には凹線が3条巡る。口縁部はナデ、頸部外面はハケメである。

c 土製品・石器・古銭 (112~125, 第27図, 図版13)

面子状土製品 (112~119)

119がSK113から出土している以外はすべて (112~118) SK112から出土している。形態的には比較的大きなもの (112~114・117~119) と小型のもの (115・116) のがある。また丁寧に面取りをしているもの (112~116・119) と粗雑なもの (117~118) がある。粗雑なものは未製品の可能性もある。素材には瓦を転用したもの (112~117), 陶器を転用したもの (118), 須恵器を転用したもの (119) がある。

砥石 (120・121)

120はSX25から出土している。柱状の礫の4面を研磨面として使用している。半分程度が欠失している。121はSB16から出土している。板状の礫で半分程度を欠失している。四面はかなり丁寧に研磨されている。

石錐 (122)

122はSB15の床面から出土している。基部は丸く加工し、先端部は両側から抉っている。先端部断面は菱形である。

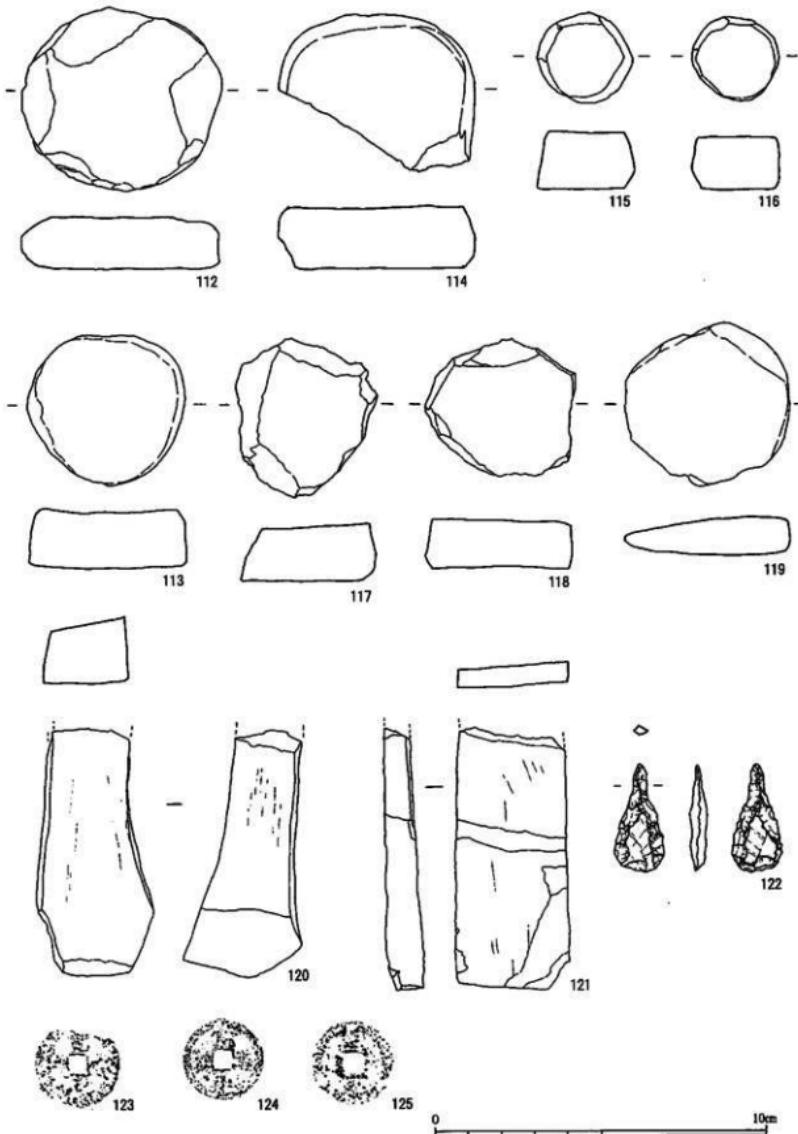
古銭 (123~125)

いずれもSK112からの出土である。鋳化が著しく、判読不明なもの (125) も存在するが、いずれも寛永通宝と思われる。

第3表 曽川1号遺跡出土遺物(土製品・石器)計測表

報告番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	出土場所	備考
112	面子状土製品	59	55	16	60.23	SK112	瓦転用
113	面子状土製品	47	45	17	46.20	SK112	瓦転用
114	面子状土製品	59	48	18	53.19	SK112	瓦転用
115	面子状土製品	29	28	18	14.11	SK112	瓦転用
116	面子状土製品	27	26	16	13.20	SK112	瓦転用
117	面子状土製品	49	44	18	32.38	SK112	瓦転用
118	面子状土製品	46	44	15	37.76	SK112	陶器転用
119	面子状土製品	49	48	12	25.48	SK113	須恵器転用
120	砥石	73	25	19	91.59	SX25	
121	砥石	78	33	12	39.90	SB16	
122	石錐	32	15	5	1.91	SB15	安山岩?

単位はmm, 重さはg



第27圖 曽川1号遺跡出土遺物実測図6 (2:3)

第4表 曽川1号遺跡出土土器観察表1

報告番号	種別	器種	部 位	計測値	色 調	胎 土	焼 成	保存状況	出土場所	備 考
1	弥生土器	壺	口縁部		黄褐色	砂粒をわずかに含む	普通	普通	SB15	
2	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	微砂粒をわずかに含む	普通	やや不良	SB15	
3	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SB15	
4	弥生土器	鉢	口縁部～胴部		黄褐色	砂粒を比較的多く含む	普通	やや不良	SB15	
5	弥生土器	鉢	口縁部～底部	復元口径94mm、器高103mm、復元底径32mm	淡黄褐色	砂粒を比較的多く含む	やや甘い	やや不良	SB15	
6	土師器	壺	口縁部～胴部	復元口径106mm	赤褐色	微砂粒を少し含む	普通	やや不良	SB15	小野丸底 蓋?
7	弥生土器	鉢	口縁部～底部	復元口径142mm、器高98mm、底径42mm	淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SB15	
8	弥生土器	鉢	口縁部～底部	復元口径162mm、復元底径76mm、器高55mm	淡黄褐色	砂粒を比較的多く含む	普通	普通	SB15	
9	弥生土器	高壺	口縁部～体部	復元口径220mm	黄褐色	砂粒を少し含む	普通	不良	SB15	
10	弥生土器	高壺	脚部	復元脚径176mm	黄褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	SB15	
11	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	やや不良	SB16	
12	弥生土器	壺	口縁部		淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	SB16	
13	弥生土器	壺	口縁部		淡黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	普通	SB16	
14	弥生土器	甕	口縁部～頸部		淡黄褐色	砂粒を少し含む	やや甘い	やや不良	SB16	
15	弥生土器	甕	口縁部～頸部		淡黄褐色	微砂粒を比較的多く含む	普通	普通	SB16	
16	弥生土器	鉢	口縁部～胴部		淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	SB16	
17	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	復元口径106mm	淡赤褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	SB16	
18	弥生土器	高壺	口縁部～体部		黄褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	SB16	
19	弥生土器	高壺	口縁部～体部		淡黄褐色	砂粒をわずかに含む	やや甘い	やや不良	SB16	
20	弥生土器	高壺	口縁部		黄褐色	砂粒を比較的多く含む	普通	やや不良	SB16	
21	弥生土器		胴部～底部	復元底径82mm	淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SB16	
22	弥生土器		胴部～底部	復元底径62mm	淡赤褐色	微砂粒を少し含む	良い	普通	SB16	
23	須恵器	坪蓋	天井部～口縁部		淡青灰色	砂粒をわずかに含む	良い	良好	SB16	
24	須恵器	坪蓋	天井部～口縁部		青灰色	微砂粒をわずかに含む	良好	良好	SB16	
25	須恵器	提瓶	頸部～胴部		青灰色	砂粒をわずかに含む	良好	良好	SB16	
26	瓦質土器	高壺	体部～脚部	脚径92mm	黒褐色	砂粒を少し含む	甘い	不良	SB16	生焼け?
27	磁器	茶碗	口縁部～体部		淡黒褐色	微砂粒をわずかに含む	良好	普通	SB17	天日茶碗
28	縄文土器	深鉢	口縁部～体部		淡黄褐色	砂粒を多く含む	普通	普通	SK92	
29	弥生土器	壺	口縁部		黄褐色	砂粒を比較的多く含む	普通	不良	SK92	
30	弥生土器	甕	口縁部～頸部		黄褐色	砂粒を多く含む	やや甘い	不良	SK92	
31	弥生土器	甕	口縁部～頸部		淡黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	やや不良	SK102	
32	土師質土器	皿	口縁部～底部		淡黄褐色	微砂粒を若干含む	普通	普通	SK102	
33	土師質土器	皿	口縁部～底部		淡黄褐色	微砂粒を含む	普通	普通	SK102	
34	陶器	長頸壺	頸部～胴部		暗茶褐色	微砂粒をわずかに含む	良好	普通	SK104	二次焼成を受けたためか器表の剥落多し
35	土師質土器	皿	口縁部～底部	復元口径106mm、器高20mm、底径8mm	淡黒褐色	砂粒をわずかに含む	普通	普通	SK104	
36	土師質土器	皿	口縁部～底部	復元口径103mm、器高16mm、底径77mm	淡黒褐色	砂粒をわずかに含む	普通	普通	SK104	
37	土師質土器	皿	口縁部～底部	復元口径98mm、器高13mm、底径80mm	淡黄褐色	微砂粒をわずかに含む	普通	普通	SK104	

第5表 曽川1号追跡出土土器観察表2

報告番号	種別	器種	部位	計測値	色調	胎土	焼成	保存状況	出土場所	備考
38	土師質土器	皿	口縁部～底部	口径89mm、器高11mm、底径56mm	黄灰色	微砂粒をわずかに含む	やや甘い	やや不良	SK104	
39	土師質土器	皿	口縁部～底部	復元口径76mm、器高13mm、復元底径50mm	淡黄褐色	砂粒を少し含む	やや甘い	やや不良	SK104	
40	土師質土器	皿	口縁部～底部	復元口径66mm、器高11mm、復元底径50mm	淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SK104	
41	土師質土器	皿	口縁部～底部	口径33mm、器高21mm、底径49mm	淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	SK104	
42	土師質土器	皿	口縁部～底部	口径62mm、器高11mm、底径48mm	淡黑褐色	砂粒を少し含む	やや甘い	やや不良	SK104	
43	土師質土器	皿	口縁部～底部	復元口径63mm、器高13mm、復元底径52mm	淡黄褐色	微砂粒を少し含む	やや甘い	やや不良	SK104	
44	須恵器	瓶	底部		淡青灰色	微砂粒を若干含む	良い	普通	SK113	
45	弥生土器	壺	口縁部		淡黄褐色	砂粒をわずかに含む	普通	やや不良	SK117	
46	弥生土器	壺	口縁部～頸部		黄褐色	砂粒を少し含む	良い	普通	SK117	
47	弥生土器	壺	口縁部～頸部		淡黄白色	砂粒を少し含む	やや甘い	やや不良	SK117	
48	弥生土器	壺	口縁部～頸部		黄褐色	微砂粒をわずかに含む	普通	やや不良	SK117	
49	弥生土器	壺	口縁部～頸部		淡黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	普通	SK117	
50	弥生土器	壺	口縁部～頸部		淡黄褐色	微砂粒を少し含む	良い	普通	SK117	
51	弥生土器	鉢	口縁部～胴部		淡黄褐色	砂粒を比較的多く含む	やや甘い	やや不良	SK117	
52	弥生土器	高杯	口縁部～体部		黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SK117	
53	弥生土器	胴部～底部			淡黄褐色	砂粒を比較的多く含む	良い	普通	SK117	
54	弥生土器	壺	口縁部～胴部		淡黄褐色	砂粒を比較的多く含む	普通	普通	SK120	
55	弥生土器	鉢	口縁部～頸部		黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SK120	
56	弥生土器	胴部～底部	復元底径51mm		黄褐色	砂粒を多く含む	普通	やや不良	SK120	
57	須恵器	坪蓋	天井部～口縁部		青灰色	微砂粒を若干含む	良好	良好	SK120	
58	弥生土器	壺	口縁部		淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SK121	
59	須恵器	瓶	底部	復元底径98mm	淡青灰色	砂粒を少し含む	普通	良い	SK121	
60	土師器	壺	口縁部～頸部	復元口径190mm	黄褐色	砂粒を少し含む	良い	普通	SK126	
61	土師器	壺	口縁部～頸部	復元口径194mm	黄褐色	砂粒を少し含む	良い	良い	SK126	
62	土師器	壺	口縁部～底部	口径192mm	淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SK126	
63	土師器	壺	口縁部～頸部	口径158mm	淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SK126	
64	土師器	壺	口縁部～頸部		淡黄褐色	砂粒を比較的多く含む	普通	普通	SK126	
65	土師器	壺	口縁部～頸部		淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SK126	
66	土師器	壺	口縁部～頸部		黄褐色	微砂粒をわずかに含む	普通	普通	SK126	
67	土師器	壺	口縁部～頸部		淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	SK126	
68	土師器	鉢	口縁部～胴部		淡黄褐色	砂粒を比較的多く含む	普通	やや不良	SK126	
69	土師器	鉢	口縁部～胴部		淡黑褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SK126	
70	土師器	高杯	口縁部	復元口径336mm	淡黄褐色	砂粒を比較的多く含む	普通	やや不良	SK126	
71	土師器	高杯	脚部	脚径223mm	黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SK126	
72	土師器	胴部～底部			淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SK126	底部中央にわずかに平坦面が残る
73	弥生土器	高杯	口縁部		淡赤褐色	砂粒を少し含む	普通	不良	SD19	
74	土師器	瓶	口縁部		淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SD19	

第6表 曽川1号遺跡出土土器観察表3

報告番号	種別	器種	部位	計測値	色調	胎土	焼成	保存状況	出土場所	備考
75	土師器	壺	口縁部～頸部	復元口径296mm	淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	SD19	
76	須恵器	長頸壺		復元口径100mm、器高221+α、頸部径42mm、胴部径176mm	淡黄灰色	微砂粒を少し含む	良好	良好	SD19	
77	須恵器	壺身	底部		淡青灰色	砂粒を少し含む	良好	良好	SD19	
78	縄文土器	深鉢	口縁部		淡黒灰色	砂粒を多く含む	やや甘い	不良	SD20	
79	縄文土器		底部		黄褐色	砂粒を比較的多く含む	やや甘い	普通	SD20	
80	縄文土器		底部		淡黄褐色	砂粒を多く含む	普通	不良	SD20	
81	弥生土器	壺	口縁部～頸部	復元口径173mm	淡黄褐色	砂粒を多く含む	普通	不良	SD20	
82	弥生土器	壺	口縁部～頸部		黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	やや不良	SD20	
83	土師器	壺	口縁部～頸部		淡黒灰色	砂粒を多く含む	やや甘い	不良	SD20	
84	弥生土器	鉢	口縁部～頸部		淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	SD20	
85	弥生土器	高壺	口縁部～体部		淡黄褐色	砂粒を少し含む	やや甘い	不良	SD20	
86	弥生土器	高壺	口縁部～体部		淡黄褐色	砂粒を少し含む	やや甘い	不良	SD20	
87	弥生土器	高壺	脚部		淡赤褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	SD20	
88	弥生土器		底部	復元底径64mm	黒褐色	微砂粒を少し含む	普通	やや不良	SD20	
89	土師器	壺	口縁部～頸部		赤褐色	砂粒を比較的多く含む	やや甘い	やや不良	SX15	
90	須恵器	壺蓋	天井部～口縁部	復元口径125mm、器高43mm	淡青灰色	微砂粒を少し含む	良い	普通	SX15	
91	須恵器	壺蓋	天井部～口縁部	復元口径141mm、器高25mm	灰白色	微砂粒をわずかに含む	甘い	やや不良	SX15	
92	須恵器	高壺	脚部	復元脚径120mm	淡青灰色	微砂粒をわずかに含む	普通	普通	SX15	
93	須恵器	壺	口縁部～体部	復元口径138mm	淡青灰色	砂粒を少し含む	良い	良い	SX15	
94	須恵器	壺	口縁部～底部	復元口径102mm、器高39mm、復元底部径55mm	淡青灰色	砂粒をわずかに含む	良い	良い	SX15	
95	土師質土器	皿	体部～底部	復元底径65mm	淡黒褐色	微砂粒をわずかに含む	やや甘い	やや不良	SX15	
96	土師質土器	皿	口縁部～底部	復元口径90mm、器高18mm	淡赤褐色	微砂粒を少し含む	やや甘い	やや不良	SX15	
97	弥生土器	壺	口縁部		淡黄褐色	白色砂粒を多く含む	普通	普通	SX17	
98	弥生土器	壺	口縁部～頸部		黄褐色	砂粒を少し含む	良い	普通	SX17	
99	弥生土器	高壺	口縁部～体部		黄褐色	白色砂粒・雲母を含む	良い	普通	SX17	
100	弥生土器	高壺	脚部		淡黄褐色	砂粒を多く含む	普通	やや不良	SX17	
101	土師器	腰台?	口縁部		黄褐色	微砂粒を少し含む	良い	良好	SX18	
102	弥生土器	壺	口縁部～頸部		淡黒褐色	白色砂粒を多く含む	普通	普通	SX18	
103	土師器	壺	口縁部～頸部		明黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	不良	SX18	
104	弥生土器	壺	口縁部～頸部		黄褐色	砂粒を少し含む	普通	不良	SX18	
105	弥生土器	壺	口縁部～頸部		淡赤褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	SX18	
106	弥生土器	壺	口縁部～頸部		淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	SX18	
107	弥生土器	胴部～底部	復元底径42mm		淡黄褐色	微砂粒をわずかに含む	普通	不良	SX18	
108	弥生土器	底部	復元底径33mm		黒褐色	砂粒を多く含む	普通	やや不良	SX18	
109	弥生土器	底部	復元底径39mm		淡黒灰色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SX18	
110	須恵器	壺	体部～底部	復元底径72mm	淡青灰色	微砂粒をわずかに含む	良い	良好	SX18	
111	弥生土器	壺	口縁部～頸部		淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	SX25	

5 まとめ

曾川1号遺跡は御調川の南側、牛ノ皮城跡が占地する山塊を北に下った丘陵裾部に展開する集落跡である。K地区は調査地点の中では西端部に当たり、遺跡の一部は御調川の支流である江国川へと傾斜する。幾時代に渡り断続的に営まれてきた集落のためか、様々な（現代を含む）時代の遺構が複合している。このため、遺構の遺存状況は総じて悪く、ピットや土坑の多くは建物跡や集落を構成する施設の一部と思われるが、対応関係等不明確な部分が多い。

調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡2軒、中世の掘立柱建物跡1棟、弥生時代から近世の土坑47基、溝状遺構2条、性格不明遺構5基を検出した。ここではこれらの遺構の内、県内でも有数の大きさを持つと思われる弥生時代後期の竪穴住居跡について少し検討し、まとめとしたい。

大型竪穴住居跡

K地区は南北に細長い調査区である。南から北への標高差はおよそ4.5mで、緩慢な傾斜となっている。さらに東西方向では東から西へ緩やかに傾斜している。SB15はそのなかでも比較的北側に位置する。遺跡全体の中では北西部に当たる。

K地区的遺構は後世の開発等によって削平されているため遺存状況は概して悪いが、SB15も他の遺構と同様に西側1／2程が調査前に消滅していた。本遺構は多柱穴（10ないしは12本柱）の比較的大型の住居跡である。特に2期は直径10m以上の円形の住居跡を想定できる。

県内では集落跡の調査は多く実施されているが、SB15のような大型の竪穴住居跡は意外と調査例が少なく、本遺跡のように直径10mを超えるような円形の竪穴住居跡は福山市津之郷町沢田遺跡SB⁽¹⁾2や東広島市高屋町淨福寺2号遺跡SB23d、SB23⁽²⁾e、三次市三良坂町大谷遺跡SB⁽³⁾1などの例があるに過ぎない。

これらの住居跡はいずれも弥生時代後期頃の住居跡であり、沢田遺跡は集落としては散漫な住居跡分布をしており、検出した住居跡の数も少ないので集落内の平均的な住居の規模を求めることができない。したがってここでは一集落ないしはそれに近い規模を調査した淨福寺2号遺跡と大谷遺跡を基にとりあえず時代性は抜きにして平均的な住居跡の床面積を求ることとする。

一つの尾根上の集落をほぼ全面にわたり調査をした淨福寺2号遺跡では弥生時代の平均的な大きさの住居跡はおおよそ24m²（本間換算で畳約13畳分）で、大谷遺跡ではそれほど住居跡がたくさんあるわけではないが、平均するとおおよそ26m²（本間換算で畳約14畳分）であった。

平均値では床面積の小さな（あるいは大きな）住居跡が主流にもかかわらず比較的大きな（あるいは小さな）住居跡が数件あればデータ自体は床面積が主流の住居跡よりも大きく（あるいは小さく）なってしまう。そこでもう少し厳密に見てみる。

先ず淨福寺2号遺跡では10m²未満は12、10～15m²は19、15～20m²は17、20～25m²は10、25～30m²は7、30～35m²は8、35～40m²は6、40～45m²は4、45～50m²は4、50～55m²は4、55m²以上は2であった。大まかな百分率でいければ25m²未満が60%以上を占めるので、むしろこちらのほうが

実情に近いと思われる。そこで 25m^2 以下について再度平均値を求める約 14.6m^2 （本間換算で疊約8疊分）となる。

同様な操作を大谷遺跡で行うと、 10m^2 未満は3、 $10\sim15\text{m}^2$ は4、 $15\sim20\text{m}^2$ は11、 $20\sim25\text{m}^2$ は7、 $25\sim30\text{m}^2$ は5、 $30\sim35\text{m}^2$ は7、 $35\sim40\text{m}^2$ は7、 40m^2 以上が5であった。大谷遺跡の床面積は $15\sim20\text{m}^2$ にピークがあり、次いで $20\sim25\text{m}^2$ 、 $30\sim35\text{m}^2$ 、 $35\sim40\text{m}^2$ が多い。全体でおおよそ7割強が $15\sim40\text{m}^2$ までの住居跡で、この床面積を再度計算するとおおよそ 26m^2 で先の値と同じとなった。中間の $30\sim35\text{m}^2$ を省いてもほぼ同じ値となる。

本遺跡例では推定で約 80m^2 （本間換算で疊約44疊分）、沢田遺跡例では約 78m^2 （本間換算で疊約43疊分）、浄福寺2号SB23dでは 70.7m^2 （本間換算で疊約38疊分）、浄福寺2号SB23eでは 78.5m^2 （本間換算で疊約43疊分）、大谷遺跡SB71では 78.5m^2 （本間換算で疊約43疊分）であるから、仮にこれが標準的な床面積の数値であるとすれば本遺跡のSB15は浄福寺2号遺跡標準住居の5.4倍・大谷遺跡標準住居の約3倍、沢田遺跡SB2はおのおの5.3倍・3倍、浄福寺2号SB23Dはおのおの4.8倍・2.7倍、浄福寺SB23eと大谷遺跡SB71はおのおの5.3倍、3倍となる。いずれにしても平均と想定できる住居跡より格段に大きな床面積である。

大型住居跡については大きな住居跡、集会所、作業場等いろいろな性格が考えられる。平均的な住居跡が平均的な家族を示すと仮定すると大型住居跡は平均的な家族の3～5倍の人員が収容可能な住居となる。通常の住まいと考えるとこの住居跡は大家族の住居跡となるが、親族関係と居住形態には不明点が多く確証はない。遺跡全体の場所からすれば作業場ないしは集会所とするほうが自然かもしれない。

結び

曾川1号遺跡は縄文時代から中世および近世まで断続的に営まれた集落である。このうち弥生から古墳時代の住居跡は北側と南側にやや集中する傾向がある。本地点の明瞭な遺構の多くは1区すなわち北側にあり、南側は近現代の遺構による擾乱が激しい。中央部の空間には擾乱が多いけれどもビットや土坑以外の遺構は概して少なく南北の住居区域に挟まれているようだ。一般的に考えればこのような空間は集落内の共有空間と表現される場合が多く、広場などの利用を想定できる。集落の西端部に当たるのであろう。大型住居跡も含め遺跡全体の検討が待たれる。

註

- (1) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（VII）』 1991
- (2) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『東広島ニュータウン遺跡群II』 1993
- (3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（VI）』 2003



a 遺跡遠景
(南から)



b 遺跡全景
(北から)



c 遺跡全景
(南から)



a K1区南半部
(東から)



b K2区北半部
(西から)



c K3区北半部
(西から)



a K1区北半部
(東から)



b K2区南半部
(西から)



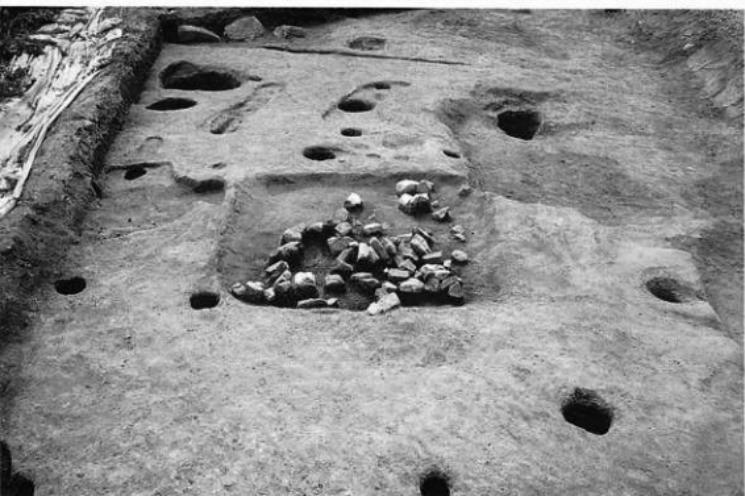
c K3区南半部
(西から)



a SB15
(東から)



b SB17
(北西から)



c SK104
(北東から)

a SB15
(南から)



b SB17
(北東から)



c SK104
(北東から)

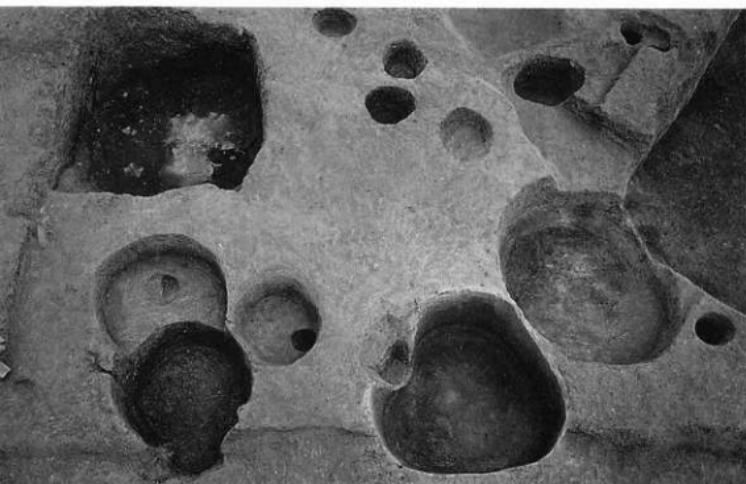




a K2区中央部
(西から)



b K1区南側
(北から)



c K1区中央部
(北から)



a SK95 (北から)



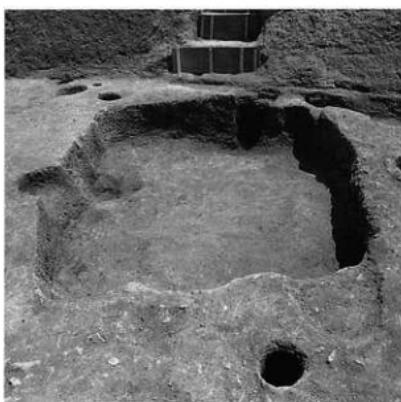
b SK96 (北西から)



c SK98 (北東から)



d SK101 (東から)



e SK102 (西から)



f SK108 (南から)



a SK112遺物出土状況（北から）



b SK112（東から）



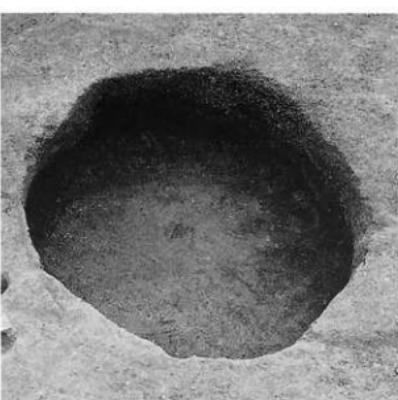
c SK120（南から）



d SK125（北から）



e SK126遺物出土状況（東から）



f SK126（東から）



a SD19
(北西から)



b SD20
(西から)



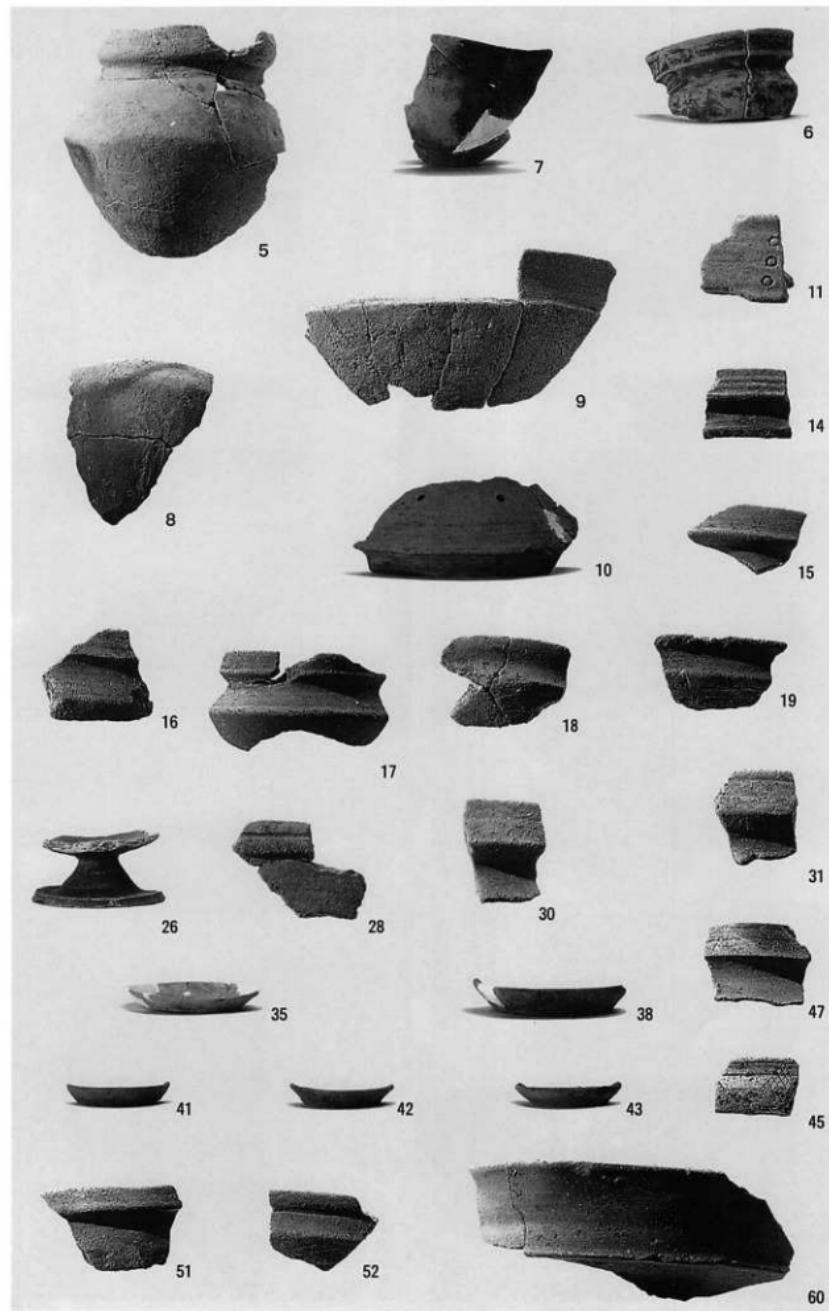
c SX15
(西から)



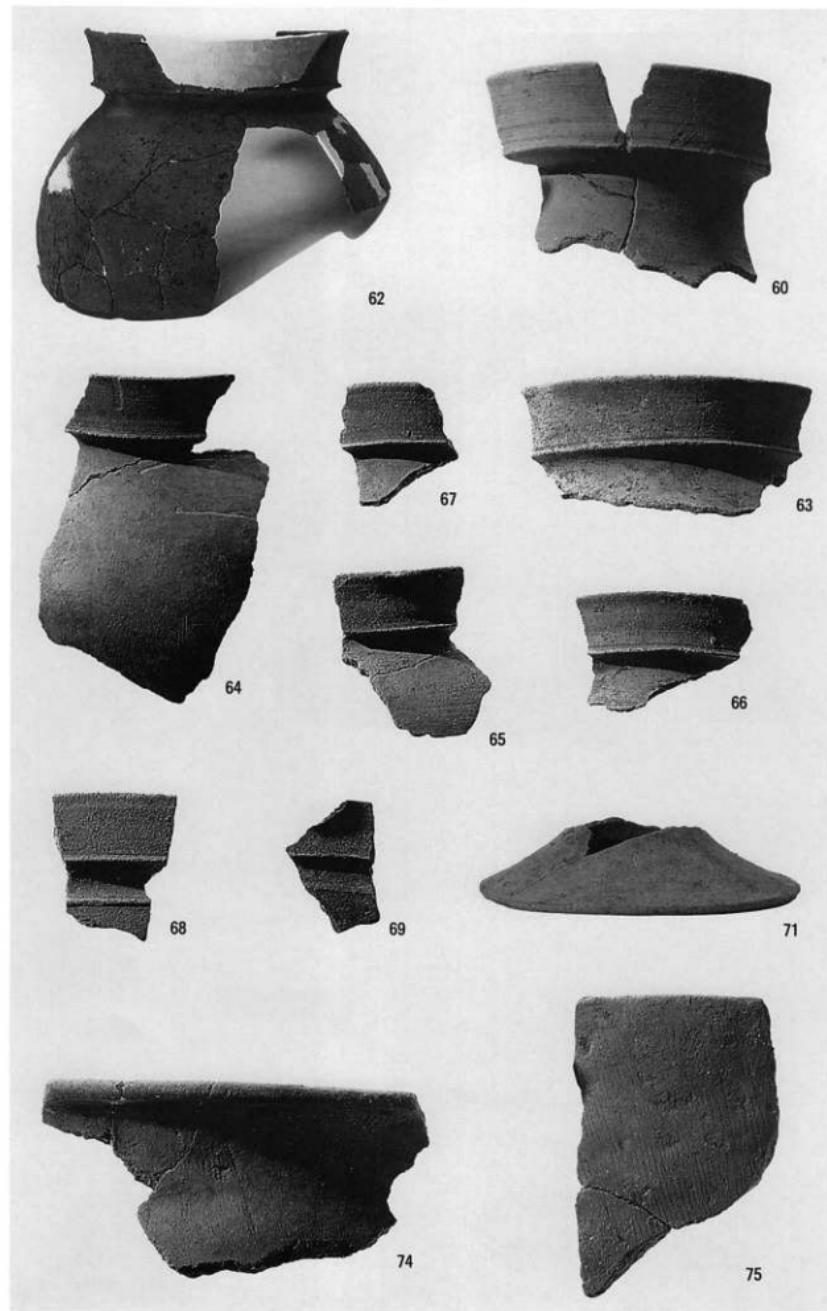
a SX17
(西から)



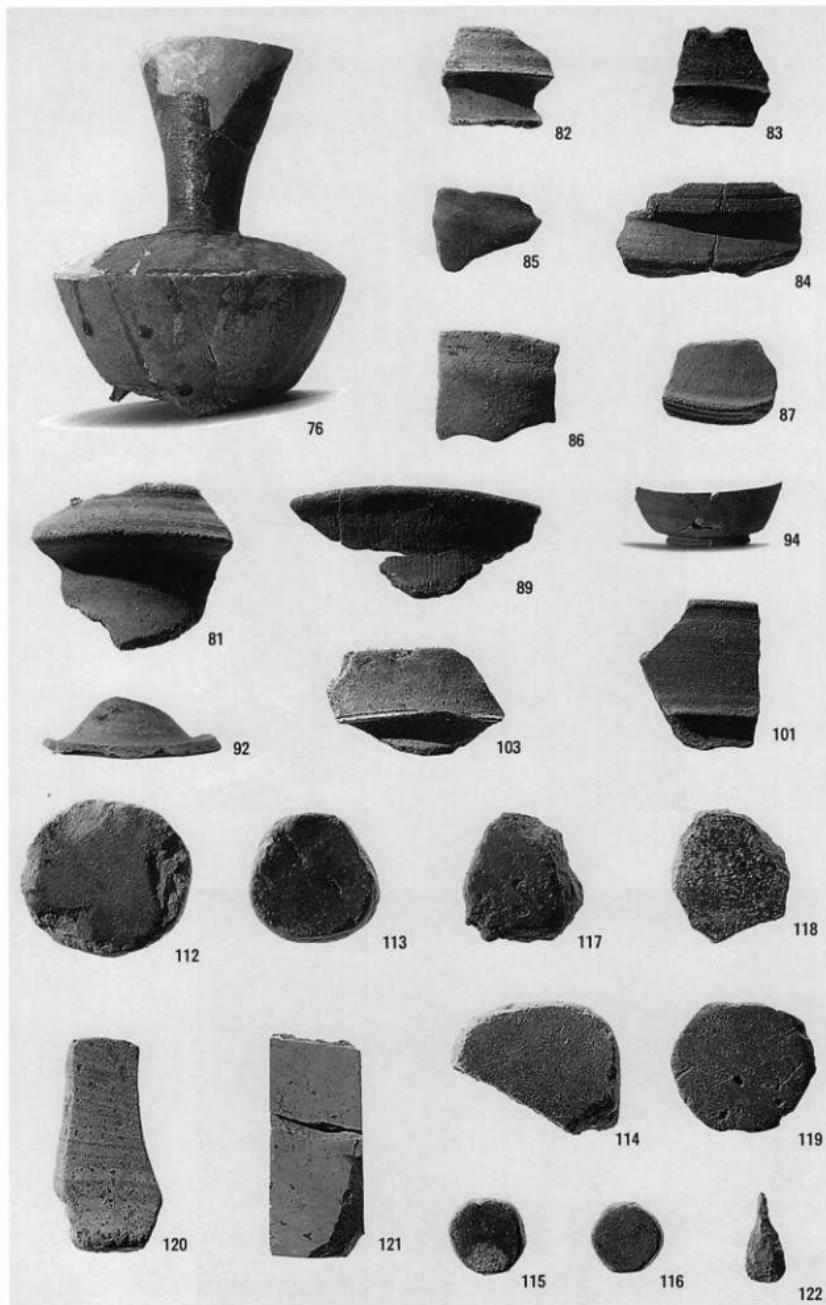
b SX18
(東から)



出土遺物 1



出土遗物 2



出土遺物3

報告書抄録

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書 第24集

**中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告（6）
吉川1号遺跡（K地区）**

発行日 平成20（2008）年3月7日
編 集 財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号
TEL (082)295-5751 FAX (082)291-3951
発 行 財団法人 広島県教育事業団
〒730-0011 広島市中区基町4番1号
TEL (082)228-8451 FAX (082)228-8441
印刷所 鯉城印刷株式会社